

サー・フィリップ・シドニー作 『詩への弁護』(翻訳と注解②)

村 里 好 俊

【検討Ⅱ、詩の構成要素について】

とはいえ、詩人を解明するに当たって彼の仕事を検討するだけで事足りるとはせず、(もっとも、仕事は毀誉褒貶きよほうへんを問わず常に高い権威を保たねばならないが)、彼を構成する各部分を、眼を皿にしていっそう精査する必要がある。その結果、(人間と同じく)、全体としてみれば威厳と美に溢れた風格を備えていながら、ひょっとして、どこかに欠陥があり、それが美しさを損なう汚点となるかも知れない。さて、彼の構成部分、種類、あるいは、類型、(何とでも、好きに呼んでよいが)、これに関して、詩によっては、二種類または三種類が結合していることに注目すべきである。例えば、悲劇と喜劇とが結合されて「悲喜劇¹」が生まれるように。同様に、サンナザーロ²やボエティウス³のごとく、形式上、散文と韻文を混合している者もいれば、英雄叙事詩的内容と牧歌的内容とを取り混ぜた者⁴もある。とはいえ、この件に関して、結局、すべてが同じことに帰結するのは、切り離されて別々のままでよいものは、結合しても有害なものになるはずがないからである。従って、

1 「悲喜劇」とは、17世紀初めの10年間にポーモントとフレッチャーによって開発された類いの芝居に当てはまるジャンル語で、フレッチャーは『忠実な羊飼』(1610?)への序文で、「悲喜劇と呼ばれる所以は、どたばたと殺人が交じっているからではなく、劇に死の場面が含まれないゆえに悲劇には程遠いが、内容的に悲劇に接近するゆえに喜劇とするには当たらないもの」と書いている。

2 **Jacopo Sannazzaro** (1458-1530) は、ナポリ生まれのイタリアの詩人。16世紀初めに出版された彼の散文と韻文から成る牧歌的ロマンス『アルカディア』*Arcadia* (1501) には熱烈な支持者が後を絶たず、ある種の流行を生み出した。この作品は、ヘリオドロス『エチオピア物語』と共に、シドニーの『アーケイディア』の典拠の一つとなった。

3 ボエティウスの『哲学の慰め』(520年頃)は、彼の処刑の前に牢獄で書かれた論考で、散文と韻文を交互に混ぜて作られている。

4 サンナザーロ『アルカディア』やシドニー『アーケイディア』がその典型。

ある種のもの忘れ去り、ある種のもの思い出す必要のないものとして省みず、一言で言えば、数個の個別の種類を引き合いに出し、それらの正しい使用に何らかの欠陥がないか確認することは見当違いにはならないはず。

そうすると、取りあえず嫌われるのは、牧歌⁵であろうか。垣根の一番低い辺りを狙って飛び越すのが、手っ取り早いやり方だろうから。侮蔑的となるのは、哀れな麦笛だろうか。麦笛の音色にのせて、あるときは、メリボエウス⁶の口から、苛酷な領主や略奪を事とする兵士たちの下で悶える庶民の悲惨な境遇を示すことが出来るのに。さらには、ティテュルスの口からは、どんな幸せな境遇が最高の御座に座る人々の善政から導き出され、下々の民に降り注がれるかが語られうるのに。ときには、狼と羊のこざい話に包んで⁷、悪行と忍耐とに関する考察の全射程を含めることも出来るし、ときには、取るに足りない褒美を争って、取るに足りない勝利しか手に入らないことを教えることも出来る。その一例として、アレグザンダー大王とダリウス⁸でさえ、誰がこの糞土に過ぎない世界の頭^{かしら}になるかでしのぎを削ったとき、彼らが得た利益といえば、後世の人々が、「僕が思い出すのは、テュルシスが奮闘空しく敗れたこと。／その時からコリュドンは、僕らの大将なのだ⁹」と言うかも知れないという程度のことを挙げておこう。

あるいは、悲しみを歌う悲歌であろうか。悲歌は、有情の人の心に非難よりは憐憫の情を搔き立てるはずであり、悲歌詩人は、偉大な哲学者ヘラクレイトス¹⁰と共に、人間の弱さと世界の惨めさを嘆く。悲歌詩人が確かに称賛

5 ルネサンス期のたいていの詩人たちと同様に、シドニーもまた牧歌を格式の低い主題設定と、それと同様に低い様式で歌える最も慎ましい詩的ジャンルと考えている。牧歌の伝統の起源は、ギリシャの詩人テオクリトス『牧歌』に遡るが、シドニーの世代の詩人たちには、古代ローマの詩人ウェルギリウス『牧歌』が重要な意味を持っていた。大陸の詩人たちに呼応して、イングランドの詩人たちも、牧歌を社会的・宗教的次元の意味を孕む磁場へと、しばしば転換した。例えば、スペンサー『羊飼の暦歌』、ミルトン『リシダス』などを参照のこと。

6 ウェルギリウス『牧歌』第一歌では、田園での平和な生活を続けることが出来る幸せな老人ティテュルス（作者ウェルギリウスの寓意的人物とされる）と、内乱のために故郷の土地を奪われて田園を去っていく不幸なメリボエウスの対照的な運命が、二人の対話を通して描かれる。

7 例えば、スペンサー『羊飼の暦歌』の「第九の牧歌」で、ディゴン・デイヴィは、もっと儲けを上げようと自分の羊をある遠い国に連れて行くが、その国の悪習と旧教の高僧のふしだらな生活について、ホピノルの求めに応じて詳しく語る模様を参照。

8 アレグザンダー大王は、二度にわたって、臆病なペルシヤ王ダリウス三世（ca. 380-330 B.C.）を打ち破るが、後者は結局自分の部下たちに討ち取られた。

9 ウェルギリウス『牧歌』第六歌、69-70行で、羊飼メリボエウスが、牧人間の権力争いに託して、世の権力闘争の空しさを歌う。ここでの意味は、「牧人仲間の間で、コリュドンが最も優れた詩人の呼び名になった」ということ。

10 Heraclitus (554?-483? B.C.) は、小アジア西部イオニアの古都エフェソス出身のギリシャ哲学者。「万物は流転する」、つまり、火を万物の根源とし、その火を除く一切のものは変転し消滅するとした。彼の哲学は一般に憂鬱で、「笑う哲学者」デモクリトスとしばしば対比される。

に値するのは、悲嘆の正しい原因に共感して心を寄せることによってか、あるいは、悲哀の激情がいかにか弱しいものであるかを正しく描出することによってである。苦いが矯正的な短長(弱強)格の詩¹¹であろうか。それは、邪悪に対して大胆かつ公然と非を鳴らして改善を求め、悪事を公言して^{つと}に恥じ入らせ、皮が擦りむけ苛立った心を責め立てるものだ。あるいは、諷刺詩か。諷刺詩人は、「笑っている友の一つ一つの欠点をさかしらに^{つうば}痛罵する」のを得意とし、戯れながらも、人の愚行を笑いの種にし、終には、人が恥じて己自身を笑うまでは、その手を緩めない。結果的に、人が笑いを避けるには、愚行を避けるしかないことになる。諷刺詩人は、「心の琴線を弄ぶ」一方で、諸々の感情に支配された生活がいかにも多くの頭痛の種を私たちにもたらすかをひしひしと感じ取らせる。詰まるところ、「平静な恒常心さえあれば、ウルブラエのごとき寂れた田舎町にあっても、幸福は得られる¹²」ということを感じてくれるのだ。いや、ひょっとして、喜劇かもしれない。性悪な戯作者や興行主たちは、喜劇をまさしく唾棄すべきものにしてしているから。喜劇を世の悪習とする議論には、後段で応答することにして、これだけは、今すぐ言わねばならない。喜劇は、私たちの日常生活に付き物の過誤を模倣して、それらを出来うる限り滑稽で軽蔑的に再現するので、見物人はだれであれ、甘んじてそのような者にはなりえないことになる¹³。

さて、幾何学においては、直角と同じく斜角も知らねばならず、算術においては、偶数と同じく奇数も知らねばならないように、私たちの人生の行動においても、悪の汚らわしさを見ない者は、徳の美しさを知覚するための好対照を欠くことになる¹⁴。喜劇は私たちの私生活や家庭生活の事柄に関してこのことを扱うが、私たちはそれを聞くことで、デメアのごときけちん坊、ダーウスのごとき狡猾い奴、グナトーのごときおべんちゃら、トラソーのごとき大法螺吹き¹⁵から何が予想されるかという、いわば、経験が手に入る。

11 ギリシャ詩では“iambic”は、「短長格」(英語では「弱強格」)は、アリストテレス『詩学』第四章によれば、より格式の低い詩類型、とりわけ、非難攻撃の詩に用いられることが多かった。

12 *Est Ulubris, animus si nos non deficit aequus.* ホラティウス『書簡集』、I. xi. 30.

13 喜劇は、古代ギリシャ・ローマ以来、文学的序列では下の階層に位置してきた。例えば、アリストテレスは、喜劇が諷刺詩から発展したものと見なしている(『詩学』第四章)し、ポッカチオは、ホラティウスに倣って、喜劇と悲劇とを、その卑俗な文体によって区別した。シドニーは、当時の公衆劇場を攻撃する者の一人ではあったが、劇作を一方的に無闇矢鱈と非難するスティーヴン・ゴッソン一派の清教徒的攻撃には与せず、喜劇の悪癖を意識しつつも、演劇の改革・改良には希望を託していた。

14 喜劇は悪徳のおぞましい歪んだ姿を人の眼に晒すことで美德を教えるという、ここにあるような考え方には、先例がないわけではない。例えば、スカリジュール『詩学』、III, 97; サー・トマス・エリオット『為政者の書』など。

15 これらはすべて、ローマの喜劇作家テレンティウス Terence (190?-159 B.C.) の喜劇に出る人

ただ単にどんな結果が期待できるかを知るだけでなく、喜劇作家によってこれらの人物に与えられた目印となる特徴¹⁶を通して、各々がどういう人物であるかも知ることが出来るのだ。悪がこのような描出されるのを見ることで、人々が悪を見習うなどと言う理由は、どこにもほとんどない。なぜなら、前述の通り、誰であれ、真実が自然の中に有する力によって、これらの者どもが彼らの役柄を演じるのを見るやいなや、彼らを「碾き臼の中へ¹⁷」放り込みたいと思わない人はいないからだ。もっとも、己自身の欠点を詰め込んだ頭陀袋はずっと後ろの方に置いて来ているので、自分も同じ曲に合わせて踊っているのが見えないかも知れないけれど。大きく眼を開いてそのことを察知するのに、己自身の行動が侮蔑的に舞台の上で演じられるのを見物するにしくはない。

従って、喜劇を正しく利用することは（思うに）誰にも非難されることではないし、ましてや、高尚で卓越した悲劇を利用することは、なおのこと非難される謂われはない。悲劇は、どんな大きな傷をも切開し、組織で覆い隠されている潰瘍を暴き出し、また、国王たちには暴君になることを恐れさせ、暴君たちには己の暴君的気質を曝け出させ、感嘆と憐憫の感情を掻き立ててこの世の不確かさを教示し、いかに脆弱な基盤の上に、金色に輝く屋根が築かれているのかを教える。悲劇は私たちに悟らせてくれる、「苛酷な権力を駆使して支配する残酷な暴君は、彼を恐れる者たちを恐れる。そして、恐怖はそれを作り出した本人に戻ってくる¹⁸」ということ。

とはいえ、悲劇がどれほど人々の心を動かすことが出来るかに関しては、

物。Demea は *Adelphoe* に登場する厳格な父親、Davus は *Andria* に出る狡知の奴隸（典型的悪党）、Thraso は *Eunuchus* に出る大言壮語の軍人、Gnatho は Thraso の食客。

16 登場人物の「目印となる特徴」とは、彼の名前、衣服、態度・物腰、喋り方その他である。『アケイディア』に現れる身分の低い人物に名を与え、描くに当たって、シドニーは劇作家並みの腕の冴えを披露している。例えば、田舎者のダメタスとその一家に関する読者の最初の印象は、以下のように、期待されるべき様相・特質を作り上げている。「この無骨な田舎者（ダメタス）は、これほど人好きのしない顔も珍しいほどヘンテコな顔をしていて、その物腰は滑稽と言っただけでは表せぬ。おまけに、服装ときたら、もうちょっとましな格好が出来ぬものかと、切にお願いしたくなるほど。妻のマイゾーは、その顔と偏平足ゆえに魔女の濡れ衣を着せられたほどの胸糞悪いババアなのだが、ただ一つ良い所と言えば、その惨めな体にはつむじ曲がりな面があって、仕来りをよく守る。この兩人（性格気質の点では決してびったりではなく、びったりではないという点でまさにびったりだったのだが）の間に出来たのが、モブサ嬢。モブサは両親のカンベキさの御相伴に与るのにまさに打って付けの娘」とあるのを参照のこと。

17 「碾き臼」とは、「粉引き場」のことで、強情で御し難い奴隸たちが罰として、そこで重労働を強いられた。

18 *Qui sceptrā saevus duro imperio regit, / Timet timentes, metus in ductorem redit.* (Seneca, *Oedipus*, III. 705-6).

プルタルコス¹⁹がペライの忌むべき暴君アレクサンドロス²⁰の注目に値する証言を書き記している。巧みに作られ、巧みに上演された悲劇は、この残忍きわまる男の眼から大量の涙を搾り出したという。この男は、一片の憐憫もなく無数の人々を惨殺し、何人かの肉親までも殺戮して、臆面もなく悲劇を作る材料には事欠かないのに、悲劇の甘美な暴力²¹には抵抗できなかったのである。悲劇が彼の中にそれ以上の善を生じさせなかったにせよ、彼は、石のごとく固い彼の心を和らげるかも知れないものに耳を傾けることから、思わぬ知らず、身を引くということになった。人々が忌み嫌うのは、悲劇ではもうとうない。どんなことであれ、学ぶのに最高の価値のあることを、あれほど卓越して再現する悲劇を追放するなどとは、愚の骨頂であるからだ。

では、抒情詩²²であろうか、人々の気分を最も害するのは。美しく調律された七絃の豎琴²³と完璧に調和した歌声とで美德の行為に美德の報酬である称賛を受け、道徳的規範と自然哲学的諸問題を与え、時には、永遠不滅の神への賛歌を詠唱して天の高みにまでその声を立ち上らせる抒情詩であろうか。確かに、私は自らの教養のなさを告白せねばならず、パーシーとダグラスが編纂した古謡²⁴を聞いたところで、法螺貝の音色ほどにも心が動かされ

19 **Plutarch** (c.46-c.120) は、ギリシャの伝記作家、歴史家、道徳哲学者。アテネで学び、少なくとも二度はローマを訪れて倫理学を講じた。プラトンの影響を受けて廉潔を重んじ、各分野における偉人英雄をギリシャとローマとから一人ずつ選んでその伝記を対比して描いた *The Parallel Lives of Illustrious Greeks and Romans* (『ブルーターク英雄列伝』) の著者。Sir Thomas North によるこの英訳は 1579 年に出た。道徳、宗教、物理、政治、文学、教育などに関するエッセー 83 編をまとめた彼の *Moralia* 『道徳論集』は、ルネサンス以後の文学・思想に大きな影響を与えたと言われる。

20 紀元前 4 世紀、古代ギリシャ、Thessaly テッサリアの都市 Pherae ペライの専制君主。プルタルコスの記述に拠れば、アレクサンドロスは残酷極まる暴君として知られていたが、エウリピデスの *Troades* の観劇中、涙しているのを見られないように中座したという。彼ははじめアテネと同盟して膨張するテーベに反抗し、のちにはテーベと組んでアテネを攻めた。その間国内にも反乱が絶えず、最後には(一説によれば妻によって)暗殺された(358 B.C.)。

21 アリストテレスが悲劇を論じている文脈に“hadus (sweet)”という言葉が何度か現れるが、“sweet violence”(甘美な暴力)というオクシモロンの言い回しは、シドニーの散文の目印となる特徴でもある。

22 ギリシャの人々にとって、元来、抒情詩とは、一人の演じ手が豎琴の伴奏に乗って歌う歌であった。そのような歌の内容は、幅広い主題に及んでいた。シドニーは、それに加えて、個人的な、しばしば恋愛的感情を比較的短い行数で表現する手段としての抒情詩という、より近代的な概念を意識している。

23 **Lyre** 古代ギリシャの 7 絃のたて琴。胴の部分を通常亀甲で作り、そこから上方内側に彎曲する二本の腕を左右に出し、その二本の腕に水平に交差する横棒(yoke)を固定し、この横棒と胴との間に 7 本の絃を張ったもの。歌唱や吟唱の伴奏楽器として用いられた。Lyric とは、元来、lyre に合わせて歌う詩文の意味。

24 “The Ballad of Chevy Chase”のこと。Chevy 地方は、イングランドの北方、ノーサンバランドの北部、スコットランド国境沿いの丘陵地帯で、古来狩猟地として知られる。この国境地方における Percy 家と Douglas 家との闘争を主題とするイギリス最古のバラッドの一つがこの歌で、多分

た覚えのないことは認めねばならないが、しかし、それは、流儀も粗野だし、声音も粗野な、一介の盲目のフィドル奏者²⁵が歌ったもので、未開の粗野な時代の埃と蜘蛛の巣を汚くまっていた。もしそれがピンダロス²⁶の絢爛たる雄弁で盛装したならば、どのように機能するであろうか。ハンガリーでは²⁷、私が見聞したところ、あらゆる祝宴やその他同様の催し物において、先祖の武勇の歌を歌うことを風習としており、その正しく武勇に秀でた国民は、そういう歌を、勇猛な豪胆さを燃え上がらせる最も主要なものと考えている。無類の民スパルタ人²⁸はこの類いの音楽を常に戦場へ携えて行っただけでなく、故国にあっても、そのような歌が作歌され、皆が^ま捧^まってそれを歌うことに満足を感じた。その歌の中に、壮年の男たちは己がすることを、老人たちは己がしたことを、若者たちは己がするであろうことを織り込んで歌うことになっていた。一方で、ピンダロスは価値の低い勝利を、美德よりは娯楽・遊戯にかかわる勝利を、数知れず高く称揚したと申し立てるものがあるかもしれない。それに関して言えば、それは詩人の罪であって、詩それ自体の罪ではないと釈明できる。実際に、主たる罪はギリシャ人の時代と慣習にあり、彼らはそういうよしなし事を極めて高く評価し、マケドニア国のフィリッパ王²⁹のごときは、オリュンポス³⁰での競馬レースで優勝したことを神をも恐れぬ³¹三大至福の一つに数えたほどだ。とはいえ、類を寄せ付けぬピンダロスがしばしばそうしたように、この種の詩は、私たちの思考を怠惰の眠りから覚醒させ、誉れ高い企てを掻き抱かせる上で、最も有効かつ最も適したものである。

残るは、英雄詩³²。この名を聞くだけで、思うに、すべての陰口屋がたじた

15世紀に作られたとされ、Thomas Percy (1729-1811) が編纂した *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) に記載されている。この戦いで両家ともに多大の流血を見たのち、両当主ともに討死する。

25 fiddler (ヴァイオリンのことを Wales では crwth と言う。)

26 Pindar (ピンダロス) (522 or 518-c.438B.C.) ギリシャ最高の叙情詩人。とりわけて、*Epinicia* 『祝勝歌集』で知られ、それには40余篇の Ode が含まれる。国家的競技会での勝利を称えるそれらの Ode は、思想の高邁と文体の壮麗さで有名。

27 シドニーは、彼の大陸遊学の間 (1572年春-1575年春) の1573年にハンガリーを訪問した。

28 スパルタ人は尚武の民として知られ、力強い生き方と厳格な軍の規律で称賛された。プルタルコス、『リュクルゴス伝』21章には、スパルタ人が戦の前、そして戦の最中に、音楽を奏して戦ったという記述がある。

29 Philip II (c.382-336B.C.) Alexander 大王の父。プルタルコス『アレグザンダー大王伝』第三章に拠れば、フィリッパ王は、戦での勝利と、オリンピアでの競馬レースの優勝と、息子アレグザンダーの誕生の知らせを、全く同じ日に受けた。

30 オリンピア Olympia のこと。ペロポネソス Peloponnesus 半島北西部山中の平地で、ゼウスの聖地であり、Olympic Games が催されたところ。この地のゼウスの神像は、世界七不思議の一つ。

31 原文は、fearful. このような幸運が続くことは、神々の不興を掻き立てると考えられていた。

32 アリストテレス (『詩学』第26章) の悲劇好みにかかわらず、ルネサンス時代の詩人や批評

じになることは必定。なぜなら、他でもないアキレス、キュロス、アエネーアス、トゥルヌス、テュデウス³³、リナルドー³⁴のごとき歴戦の勇士を引き連れているものに対して、悪し様に罵る^{あなど}ように導かれる舌があれば、思い違いも甚だしいからである。英雄詩は、真理を教示し人の心をそこへと動かすだけでなく、最高至宝の真理を教示し人の心をそこへと動かす。英雄詩は、寛仁と正義をあらゆる恐怖の霞と欲望の霧を透過して輝き出させる。徳を見れば必ず誰しも、驚異に打たれて陶然とし、徳の美しさを愛することになるというプラトンやキケロの言葉が真実であるならば³⁵、英雄叙事詩人はそれに嗜れ着をまわせ、理解するまでは乙に澄まして軽蔑などしないと言う人の目に、いっそう美しい映るようにそれを飾り立てる。しかし甘美な詩を擁護してすでに何ほどの事が言われたとすれば、ありとある言辞がすべて協同してこの英雄詩の護持へと向かう。英雄詩は詩の一種であるばかりか、最善にして最も完璧な種類の詩であるからだ。各々の行為の画像が人の心を掻き立て教導するように、そういう偉人の高邁な画像は、偉人になりたいという願望で人の心を最も燃え立たせ、どうすれば偉人になれるかを助言してくれる。ただアエネーアスを記憶の銘板に刻み込みさえすれば、それで事足りよう。祖国の滅亡に際して、彼がいかに自らを律したかを。年老いた父を背負い、祭儀用の神器を運び出した際に。激烈な愛慕の情のみならず、徳高い恩義を仇で返してはならぬとする人間としての道義心そのものが、まさにそれと反対の行動を取るようにと彼に迫ったにもかかわらず、神の命に服従してディドーを置き去りにした際に³⁶。嵐に遭ってはいかに、遊戯においてはいかに、戦においてはいかに。平時においてはいかに、逃亡の身になってはいかに

家たちは、叙事詩と英雄詩を最高の文学様式と評価した。英雄詩の内容に関しては様々な議論が飛び交ったが、道徳的教示をその主要目的とすべしという点では、全体的に一致していた。例えば、スベンサー『妖精の女王』補遺の「ローリー脚への手紙」などを参照のこと。

33 **Tydeus Oedipus** 亡きあと、Oedipusの息子の一人 Polyneices とともにテーベに攻め寄せた武将たち (Aeschylus's *Seven against Thebes*) のうちの一人。Diomedesの父。

34 **Rinaldo** イタリアの詩人タッソー Tasso (1544-95) が1575年に発表した彼の傑作『エルサレム解放』*Jerusalem Liberate*の主人公。エルサレム奪回の勇士。

35 徳が眼に見える姿で現れるならば、徳が人間生活を支配することになるであろうとする考え方は、プラトンの『パイドロス』に由来するが、シドニーはほぼ明らかにラテン語で書かれたキケロの『義務について』からそれを得ている。シドニーの美学は、詩は諸々の理想のアイデアを心の眼に映じるとする前提に基づいていたので、最高の文学には徳の映像が満ちているとする。詩における絵画的特質は、知性を教導するのみならず、意志を刺激して善行へと導くとする考えは、シドニーの『アストロフィルとステラ』25番にも見られる。

36 **Dido** は、*Aeneid* に出るカルタゴ Carthageの女王。トロイ落城後カルタゴに漂着したアエネーアスに熱烈に恋したが、彼が神の命令を受けて彼女を捨ててカルタゴを去ると、彼女は悲歎のあまり船に乗って逃げる彼の眼にみえる岬の上で自害した。この物語は、『アエネーイス』第四歌で描かれる。マローウ作『カルタゴの女王ダイドウ』も参照。

に、勝利者としてはいかに、敵に包囲されてはいかに、敵を包囲してはいかに、異国人に対してはいかに、同盟者に対してはいかに、敵に対してはいかに、自国民に対してはいかに。最後に、彼の内面的自己においてはいかに、外面的行動においては、いかにあったかを。そうすれば、ひがみ根性でひん曲がった心の持ち主でなければ、彼が優秀な果実を生み出していることを認めるのにやぶさかではないであろう。実際、ホラティウスが述べているように、「クリシプスやクラントールより巧みに³⁷」なのである。

しかし、実は、このようなことが詩人を鞭打つ人たちには気に入らないのは、想像するに、しばしば病気を訴えながら、正直なところどこが悪いのか分からないご婦人方が苦情を申し立てるのに似ている。その手の人たちには、詩という名称がそもそも気に食わないのであり、詩の原因や結果、詩を含む総体や詩を作る個々の要因が、彼らの口喧しい^{やかま}誹謗にしっかりした手掛かりを与えているのではない。

【ここまでの要約】

以上の次第で、詩はあらゆる人間の学問の中で最も古く、他の学問の起源が詩にあるという意味で、初源的古さがあるゆえに、詩は最も普遍的で、学芸のある国民で詩を侮蔑するものはなく、野蛮な国民であれ、詩に欠けるものはないゆえに、ローマ人もギリシャ人も詩に神のごとき名を与え、前者は「預言する」と言い、後者は「作る」と述べた。実際、鑑みるに、「作る」という名称が詩人にぴったりなのは、他の諸学芸はそれらが扱う主題の範囲内に限定され、いわば、主題からそれらの存在理由を得ているのに対し、ひとり詩人のみは、自ら主題を持ち込み、具体的事物から観念を引き出すのでなく、彼が伝えたいと思う観念にピッタリ沿うような事物を自ら作り出すゆえに³⁸、詩人の叙述にも、詩人の目的にも、悪は一つたりと含まれず、叙述されたものも悪いはずはないゆえに、詩人の生み出す効果は、善を教えるほどに善きものであり、かつまた、善を学ぶ者を楽しませるがゆえに、その点において（すなわち、すべての知識の中で最高位にある道徳的教えにおいて）、詩人は歴史家を遙かに凌駕するだけでなく、教え方において哲学者にはほぼ比肩し、人の心を動かすということでは、哲学者を尻目にするゆえに、聖書（その中には一点の不浄もないが）には、その全体が詩的である部分が含まれ、

37 ホラティウス Horace (*Epistles*, I. ii. 4) は、初期ストア派の哲学者クリュシッポス Chrysippus (ca. 280-207B.C.) と傑出したプラトン主義者クラントル Crantor (ca. 335-275 B.C) よりは、トロイ戦争の物語を描くホメロスの方に、道徳的に教えられるものがいっそう多くあると言っている。

38 詩人はただ単に外的自然から彼の観念を導き出すだけでなく、むしろ、心の内に理想的概念を生み出し、それから、彼自身が創作した具体的人物や事件の中に、それを描き込むのである。

加えて、私たちの救世主キリストでさえ詩の花々³⁹をかたじけなくも用いられたゆえに⁴⁰、あらゆる種類の詩は、それらを合体した形においてばかりか、個々を切り離して緻密に検査しても、^{まご}紛うかたなく推奨に値するゆえに、私見では、(私見は正しいと信じるが)、凱旋将軍に授与される月桂樹の冠は、(他のあらゆる学問にまさって)、詩人の勝利に榮譽を捧げるにふさわしい⁴¹。

【詩に対する非難への反駁】

ところで、私たちには舌もあれば耳もあるし、存在しうるいかなる軽微な理由とて、秤の中に釣り合い重りとして何も載せなければ、極めて重く見えるものであるから、この芸術に対して為されるかもしれないいかなる反駁であろうと、認知するに、もしくは、返答するにやぶさかではないものに耳を傾け、出来る限り考察することにしよう。

まずは、実のところ、「ミソムーサイ *mysomousoi*」、即ち、詩人嫌いにおいてばかりでなく、他人を小ばかにすることで称賛されようとするすべての人々において、私が注目するのは、その類いの人々がことごとくに目くじらを立て^{あなど}嘲り^{なじ}詰って、多数のとんでもない迷言を無闇に非難中傷に浪費することだ。脾臓⁴²を刺激され癩癩を起こすことで、肝心の頭脳の働きが鈍り、主題と目されていることの価値を沈着冷静に考察することが出来なくなるのである。この類いの異論・反論は、いかに神聖で威厳あるものでも、苛立ってむずむずした舌には必ず擦り寄られるのが道理なので、まったく的外れの軽口をのんきに叩いているのだから、その冗談を笑う代わりに、そういう冗談を口にする^{やから}輩を笑ってやれば、返答として十分にふさわしい。才人は、戯れに、驢馬の思慮分別、借金地獄の気楽、疫病に罹っていることの愉快な好都合を褒め称えることが出来るものだ。だからして、逆に、オウイディウスの

39 読む人を魅了する詩の技巧的言葉の修辭のこと。

40 これはおそらく、人々に教えを垂れるにあたって、キリストが寓話の例え話を利用したことを指している。

41 シドニーは、おそらく、ペトルルカの『凱旋式』の中で、1341年にローマで「桂冠詩人」としてペトルルカが月桂冠を捧げられたことを念頭に置いて、この一節を書いている。古代ローマにおいては、月桂冠は、一般に、故国に凱旋帰国する将軍に授けられた。

42 ルネサンス時代には、脾臓は気紛れ、移り気の生理学的原因とされ、哄笑、憂鬱、不機嫌の源と解釈された。

詩句を転じて言えば、「善は悪の陰に隠れて潜む⁴³」のである。エラスムス⁴⁴が痴愚神礼賛を愉しげにするに負けず劣らず、アグリッパ⁴⁵は学問の空しさを愉しげに説く。どんな人間でも、どんな物でも、これらの微笑を湛えて悪口を事とする者の鋒先を多少とも逃れる術はないであろう。しかし、エラスムスとアグリッパに関して言えば、二人は表面的な部分が期待させるのとは違う、より深い目的を基盤にしていた⁴⁶。実のところ、両名とは違って、名詞を理解しないうちに動詞を訂正しようと逸り、自らの知識をしかと確定しないうちに他人の知識を論駁しようと意気込むこれらの機知を弄ぶ粗糲し屋どもには、嘲笑は真の叡智の産物ではないことを、よくよく覚えておいて欲しいものだ。要するに、彼らのおどけに関して彼らが手にする真の英語での最高の称号は、せいぜい、「気の利いたひょうきん者 good fools」と呼ばれること。私たちの厳父たちは、その種のむつつりしたふざけ者をそう呼び習わしてきたからだ。

【韻文について】

とはいえ、この者たちの嘲笑的気質に最大のはけ口を与えているのは、詩とは韻律を整えて作られた韻文であるとする考え方だ。すでに指摘したとお

43 Ovid (43B.C.-A.D.18) 古代ローマの詩人の作、*Ars Amatoria* (『愛の技術』)、II巻・662行。その他の作品として、*Remedia Amaris* (『愛の癒し』)、ルネサンス詩人・劇作家の大きな靈感源となった *Metamorphoses* (『変身物語』)、*Fasti* (『祭暦』) など。『愛の技術』などがアウグスツス帝の綱紀肅清政策に合わず、オウディウスは8年に黒海沿岸の僻地トミスに追放された。その後 *Tristia* (『悲歌』)、*Epistulae ex Ponto* (『黒海だより』) などによって帰国の嘆願を繰り返したが、ついに帰国を許されなかった。中世、ルネサンスを通じて彼の作品はよく読まれ、芸術家たちの神話的題材の源となり、大きな影響力を与えた。

44 Erasmus, Desiderius (c.1469-1536) は、オランダのロッテルダム Rotterdam に生まれた偉大なユマニスト、神学者。幼少の頃から聖職者の教育を受けて司祭になり、後にパリに出て神学を研究し、ギリシャ・ローマの古典を学んだ。膨大な著作と書簡により中世以来の腐敗したローマ教会を鋭く批判。人間の痴愚と狂気を諷刺し、宗教改革の嵐の中では教会の自己粛清を信じ、聖書の福音主義と寛容を説き、当時のヨーロッパ思想界に君臨した。イングランドの政治家・宗教家でユマニストのモア Sir Thomas More の親友で、しばしば訪英し、モアの家に滞在した。モアの家で書かれ、1511年に出版された彼の名著 *Encomium Moriae* (『痴愚神礼賛』) は、痴愚女神が語り手となって、自らを礼賛するという反語的方法を利用し、人間性の本質にある狂気と当時の神学者や聖職者の愚劣・腐敗を暴き、横溢する批判精神によって宗教改革運動に多大な影響を与えたが、ローマ教会の禁忌に触れ、1557年禁書処分になった。とはいえ、16世紀中に58版を重ね、各国語に翻訳された。

45 Agrippa von Nettesheim, Cornelius Heinrich (1486-1535) ルネサンスのドイツの医者・哲学者で、魔法使いと疑われた人。新プラトン主義の神秘思想の影響下に書いた *De occulta philosophia* 『秘教哲学』(1510)では、世界を三界に分ち、それを統一する世界靈魂を説いて宇宙有機体説を採り、ルネサンス自然哲学に影響を与えた。学問の空しさを述べた彼の論文は、*De Incertitudine et Vanitate Scientiarum et Artium* (『諸学の不確実性と空しさについて』)。

46 アグリッパは、人間の理性の使用に関する彼の深い疑惑にもかかわらず、そして、エラスムスは、愚かさへの彼の逆説的な称賛にもかかわらず、啓示宗教における敬虔と素朴な信仰の奨励を彼らの主要目的としていた。

り、(そしてその指摘は正しいと愚考するが)、詩を詩とするのは、韻律を整えることではない。韻文で書かなくとも詩人でありうるし、詩がなくともしがない韻文作者でありうる。しかし、今仮に詩と韻律とが不可分であるとすれば、(事実、スカリジュール⁴⁷はそう判断としているようだが)、それは不可分であることへの称賛となろう。なぜと言うに、〈ラティオ ratio〉の次に〈オラティオ Oratio〉が、〈理性〉の次に〈言葉〉が人間に付与された最高の贈物だとすれば⁴⁸、言葉という授かり物を最も美しく磨き上げることに称賛が与えられないことはありえない。その行為は、一語一語を(言うならく)その強制的質(強弱と抑揚)によってだけでなく、その綿密に測られた量(母音の長さ)⁴⁹によって考察するものだ。それらの質と量の中には、一つの真の調和が存在する、(ひょっとして、韻律の数、量、順序、釣り合いが私たちの時代には厭わしいものになっていなければ)。だが、音楽(よろしいか、諸感覚を打つ最高に神聖なものである音楽)⁵⁰に適した唯一の言葉であることにより、それが受けるはずの正当な賛辞はひとまず措くとして、以下のことは間違いなく真実である。記憶が知識の唯一の宝庫であるからには、読書しても覚えていないと馬鹿げているというのであれば、記憶に最も適した言葉こ

47 Scaliger, Julius Caesar (1484-1558) は、主としてフランスで活躍したイタリア生まれの人文学者、医者。1525年からアーヘンで活躍。その百科全書の知識、特に自然科学、哲学、古典についての知識を批判的洞察と結びつけて、様々な著作を物した。ヒポクラテス、アリストテレス、テオフラストスなどの著作への注釈も著名であるが、文芸の分野では、ボンボンナツィの影響を受け『創作論』*Poetics* (1561) を著し、アリストテレスの『詩学』を解説して大きな影響力を与えた。エラスムス Erasmus と論争したこともある。該博な知識と犀利な観察とによってルネサンス期の批評史上の重要人物と目された。フランスの古典学者で、近代的な本文批評の基礎を確立し、古典の校訂・注釈に優れた業績を上げた Joseph Justus Scaliger (1540-1609) の父。

48 この考え方はルネサンス期にも、古典古代にも、通常のものであった。言葉と理性の関係に関するシドニーの見解は、おそらく、モルネ Philippe de Mornay (1549-1623) の著作を読んだことから得られたものであろう。

49 古典詩においては、基本となるリズムの単位は、一音節を発音するのに要する時間に基づいた「計量的」なものであった。一方で、英詩は、一音節に与えられた(長短、強弱の)強勢からリズムを引き出す。短期間ではあるが、ルネサンス期にも、シドニーや彼に同調する詩人たちを中心に、音量詩に関する論争が起り、英語の音量詩を作詩する試みが為されたが、結局は、不首尾に終わった。シドニー自身は、『アーケイディア』に収められたいくつかの詩において古典的作詩法を実験しているが、『アストロフィルとステラ』を創作するころには、その熱意も覚めて良識的に慣例へと戻った。詳細については、Ringler, ed. *The Poems of Sir Philip Sidney*, pp. 389-93 を参照。

50 詩と音楽とが姉妹芸術であるという通俗的なルネサンスの見解は、それらが調和と韻律を提示するという観察から生まれた。パトナムは詩論の中で「詩は調和的に語り、書く技術であり、韻文は聞く耳を心地よくさせる音の中のある種の一致ゆえに、音楽的発話である」と述べている。また、シドニーは後に「詩の天球の音楽」と述べるように、詩の魔術的な力を天球の奏でる精妙な音楽とを結びつける伝統的な考えに与しているらしい。例えば、カスティリオーネ『宮廷人の書』には、「世界は音楽から作られ、天球は動いて旋律を作り出し、私たちの魂は学の音に合わせて形作られ、それゆえに、高く飛翔して、音楽とともに自らの美德と力を甦らせる」とある。

そ、知識のために最も便利であるということは⁵¹。

さて、記憶を編み上げることにかけて韻文は散文を遥かに凌駕するが、その理由は明々白白である。韻文での言葉は、(記憶と極めて親密な関係がある言葉が与える悦びは別勘定にしても)、一語でも欠けると作品全体が水泡に帰すというように配列されている。欠けた言葉がそれ自体に注目を引き付け、それ自体へと記憶を呼び戻し、そうしてそれ自体を強力に確定させる。その上、一つの語が、謂わば、他の一語を産み出すので、押韻詩であれ、音韻詩であれ、前の語を見れば、後に続く語がほぼ推測されるのが常である。最後に、記憶術の教師たちが伝授するところに拠れば、ある広さの部屋が隅々までよく知られた多くの場所に分けられていることほど記憶術にとって便利なことはないというのだ⁵²。韻文は本質的にその能力を完璧に備えているので、あらゆる語はそれ本来の座を持っており、その座は必然的にその語を記憶させずにおかない。しかし、あまねく周知されている事に関して、これ以上、何を言うことがあろう。かつて学生だった者で、若い頃に学んだウェルギリウス、ホラティウス、カトー⁵³の韻文の数節に夢中になり、老齢に至るまで不断の教訓として役立っていない者がいるだろうか。例えば、「詮索好きの者を避けよ、その者は見境のないお喋りだからだ⁵⁴」とか、「各人が自己満足を覚える限り、私たちは軽信の輩である⁵⁵」とか。とはいえ、詩が記憶の便に適してすることは、学芸の教授法すべてによって眼に見えて証明されていて、文法から論理学、数学、医学、その他に至るまで大部分に及んで、記憶される必要のある主な規則は、韻文の形で纏められている。事程左様に、韻文は、それ自体心地よく整然とし、知識の唯一の取っ手である記憶のために最適の

51 記憶術としての詩の持つ力は、ルネサンス期には大きな関心と議論的であり、多数の手引書が書かれた。シドニーは弟ロバートへの手紙で、記憶の技術について助言を与えている。フランセス・イェイツ『記憶術』(1966)は、それに関する詳細な研究書。

52 記憶術の通俗的技法は、一つの部屋を心の中で視覚化し、視覚化された様々な内容を様々な議論や関連する事実と繋げるというものであった。「場所」の理論は、ルネサンスの論理学と修辞学とにおいて顕著な立場を占めていた。

53 **Cato, Marcus Porcius** (234-149 B.C.), **Cato the Censor**「監察官カトー」のこと。ローマの政治家、著述家、雄弁家。民族主義的、反ヘレニズムの傾向の代表者。執政官を初め、多くの官職を歴任した。監察官として貴族の弛緩した風紀を引き締め、華奢や浪費を抑え、ギリシャ文化の輸入に反対してギリシャ哲学者と修辞学者のローマ居留を禁じた。彼の理想は古代の質素な農業国家への復帰で、ギリシャ主義のスキピオのサークルと対立した。晩年には、カルタゴの繁栄を見て粉碎の必要を説いた。著書には *Origines* (『ローマ起源論』)、*De Re Rustica* (『農事について』)があり、前者は散逸したが、後者は現存するローマ最古の散文作品である。古代ローマの政治家で、共和制護持に努めた元老院の保守的貴族。ユリウス・カエサルを政敵であった **Cato Uticensis** (Cato the Younger, 95-46 B.C.) は彼の曾孫。

54 **Percontatorem fugito, nam garrulus idem est.** (Horace, *Epithles*, I, xviii, 69).

55 **Dum sibi quisque placet, credula turba turba sumus.** (Ovid, *Remedium Amoris*, 686).

ものなので、誰かがそれに非を鳴らすようなことを言えば、それは冗談に決まっている。

【詩への四種の非難】

さて、これから、哀れな詩人に向けられた最大の誹謗に赴くことになる⁵⁶。私の知識の及ぶ限りでは、それらは次の四つの非難にまとめられる。第一の非難は、その他いくらでも有益な知識の分野は存在するのだから、人は詩以外の知識の獲得に時間を費やした方がましであるというものだ。第二に、詩は嘘の母であるというもの。第三に、詩は墮落の乳母であり⁵⁷、数々の危険な欲望で私たちを汚染し、サイレン⁵⁸の甘美な美声で心を蠱惑し、罪深い空想という蛇の尾⁵⁹を踏ませてしまうというもの。この点に関して、とりわけ喜劇は、チョーサーも言うとおりに、耕すべき最も広大な領野を与えてくれる。他の国の民においても、我が国の民においても、詩人たちが人々を軟弱にする前は、人々は剛勇に溢れ、男らしい自由の支柱である武勇の鍛錬に没頭し、詩人が与える娯楽・気晴らしであやされて木蔭で惰眠を貪ることなどなかったという⁶⁰。そして、最後ではあるが最たるものとして、中傷者たちは口々に声を嗚らし、まるで鬼の首でも取ったかのように⁶¹、プラトンは彼の共和国から詩人たちを追放した⁶²と、声を大にして呼ばれる。なるほど、このことは

56 プラトンがその著『国家』(第10章)において詩人を糾弾しているのがよく知られていたこと、中世においては想像的著作への伝統的に強い不信の念が存在したこと、清教徒の陣営からの道徳的社会的攻撃が加えられたこと、これらが「重要な誹謗」の背景形成に貢献しているが、シドニーはこれに反駁を加えようとしている。

57 これが1579年にシドニーへの献辞を付して出版された Stephen Gosson, *The School of Abuse* の立場である。この書は、一度は詩人・劇作家であったゴッソンが社会改革者に変貌し、詩人と劇作家・役者を清教徒的立場から攻撃したものである。

58 **Siren** ギリシャ神話に出る上半身は人間の女、下半身は鳥の形をした海の妖怪。海神フォルキュス、または河神アケロオスの娘で、数は二名とも三名とも言われ、南イタリアのソレントから遠くない島に住み、妙なる歌声によって、付近を通りかかった舟人たちをその美声で魅惑して暗礁に引き寄せては難破させ、海に飛び込ませて死なせたという。オデュッセウスの船を難破させるのに失敗した後、自ら海に身を投げて、石に変わったともいう。

59 原文は **Serpent's tail** で、触れると危険なものだとえであるが、tail には tale との言葉遊びもある。

60 『アーケイディア』の主人公の一人ムシドロスは、もう一人の主人公で従弟のピュロクレスが恋をしたために英雄的行為に勤しむのを忘れ、行動の人生を等閑にして、彼の無為を「詩人たちの空想」で養っていると叱責する場面がある。

61 原文は “as if they had outshot Robin Hood” で、直訳すれば「弓の腕前において名手ロビン・フッドに勝るかのごとく」となる。ロビン・フッドは中世の伝説的義賊で、シャーウッド Sherwood の森の住人。彼は弓の達人であったから、「弓で彼を負かす」とは不動の勝利を得るという意味になる。

62 プラトンが『国家』 *Republic* において描いた彼の理想国から詩人を閉め出したという、プラトンの真意を解さぬ俗説に言及している。

重大である、もしそこに多大な真実が含まれているとすればだが。

【詩への非難① 詩は時間の浪費である】

まずは、第一の非難、人はもっとましな時間の使い道があるのではないかという非難は、尤もなことである。しかし、それは（言うならく）、論点を先取りし、巧みに矛先をかわす⁶³ことに他ならない。なぜならば、断言してもいいが、美德を教えかつ美德へと導く力にかけて、いかなる学問といえども詩ほど優れてはいないこと、また、何であれ、詩ほど多くを教え導くものはないということ、それがもし的を射たものであれば、結論は明白である。つまり、断簡墨筆^{なんかんぼくひつ}がこれ以上に有益に利用されることはあり得ない。確かなことだが、たとえ万が一、人が非難者たちの最初の仮定を是認しようとも、誠に不本意かも知れないが、思うに、よりよいものがあるからには、よいものはよいと言えない道理となるであろう。私とすれば、常にかつ本心から、詩に勝る実りある知識がこの大地から産れることを否定することにかけて人後に落ちない。

【詩への非難② 詩人は嘘つきである】

詩人は嘘つきの主役だとする第二の非難に対して、私は、逆説的にだが、誠実に、本当に誠実に、こう答えよう。日の本の国のおよそあらゆる作家の中で、詩人は最も嘘をつかないし、たとえつきたくとも、詩人である限り、嘘つきになれないのである。天文学者は、その縁者である幾何学者ともども、天体の高さを図る仕事を引き受けるとき、嘘をつくことをほとんど免れえない。医者たちは、病人のためによかれと断言するとき、どれほどしばしば嘘をつくと思われるか。医者の方薬は、後になって、三途の川の渡し場のカローン⁶⁴の許に、薬に溺れて死んだ数え切れない魂を送り届けてくれるではないか。そして、偉そうに何かを断言するその他の人々も、同罪である。

さて、詩人はと言え、何一つ断言しない、それゆえに、決して嘘をつくことがない。私の理解するところでは、嘘をつくのは虚偽であることを真実であると断言することである。それに比して、他の学識者たち、とりわけ歴史家は、多くのことを断言するが、人間の曇った知識に縛られるので、多くの嘘をほとんど免れえない。しかし、詩人は、今述べたとおり、決して

63 原文は“Petere principium (to beg the question)”論理学で言う「論点の先取」を犯すこと、まだ論証されていないことを、すでに前提として取り扱うこと、独り合点の前提に立って議論を展開したり、論点を巧みに躲いたりすること。

64 Charon ギリシャ神話に出る the Styx (黄泉の川)の渡し守。一般に、醜い老人で、檻褌を身に纏い、死者たちから1オポロスの渡し賃を取り立て舟に乗せてその川を渡し、Hades (冥土)へ届けるが、舟を漕ぐ役も死者たちにさせると信じられた。埋葬の時に1オポロスを入れてもらえなかった死者は、カローンに舟に乗せてもらえないとされた。

断言しない。詩人はあなたの想像力の周りに円を描いて呪文をかけ⁶⁵、自分が書くことを真実だと信じさせることなど決してしない。彼は他の歴史家たちの権威ある文献を引用せず、詩の開巻劈頭で甘美な詩神に祈念して詩的靈感を授けてもらうだけだ。実際に、彼は、事実がどうかこうとかを四苦八苦して語るのではなく、どうあるべきか、あるいはどうあるべきでないのかを語る。それゆえ、彼は真実でないことを語るのではあるが、真実として語るのではないので、嘘をつかない。ナタンがダビデ王に向かって、拙稿の中で以前述べられた進言をするに及んで嘘をついたと言えないのと同じことだ。腹に一物ある悪党であろうと、敢えてそんなことが言えないのは、思うに、どんなに愚直な人であれ、イソップが彼の動物譚の中で嘘をついたと言わないのと同じことだ。イソップが物語を現実^{みかた}に真なるものとして書いたと信じる人は、誰であれ、彼が書いた動物たちの仲間としてその名を書き込まれるに十分値するであろう。子供でさえ、芝居見物中に、古い扉に大きな文字でテーベと書かれているのを見て、それが本物のテーベと信じることはない。だとすれば、詩人の描く人物と仕業は、どうあるべきかという絵姿であり、どうであったかという話ではないことを認識するその子供の年齢に、誰であれ達しているとすれば、断言されるのではなく、寓意的にかつ比喩的に書かれた事柄に対して、それを嘘だとは言わないであろう。という次第で、歴史に真実を求めるとき、人々は虚偽の情報を満載して出かけるのに比して、詩に虚構を求めるとき、人々はその語りをただ有益な創意の想像的土台⁶⁶として利用するであろう。

とはいえ、これに対して、詩人は描いている人物に名前を与えるが、それこそが実際の真実という考えの存在を証明し、そうして、それが実際には存在しない人物であるということで、嘘つきということになるではないかと反論される。もし、そうだとすれば、法律家がジョン・ア・スタイルとかジョン・ア・オーク⁶⁷とかいう名前の下で訴訟において言い分を述べ立てるとき、彼は嘘をついていることになるのか。しかし、それに対する答えは簡単だ。詩人が人々に名前を与えるのは、彼らの絵姿をそれだけいっそう生き写しに

65 **Circles** 魔法使いが彼の杖で地面に描く円のこと。その円内が魔法圏となり、その中にいる人は魔法にかかって無力になる。詩人は彼の読者を魔法にかけて虚偽を受け入れさせることなど決してしないとシドニーは主張する。

66 この場合の「想像的土台」とは、どんな作品であれ、それを基にして構築されたり創作されたりする概要、一般的計画もしくは根拠となるものである。読者がその外形的枠組みを利用して、詩人の独創的な「心的画像または前概念」の真の意味を練り上げる（創案する）ことになる。

67 **John of the Stile and John of the Noaks** 英語で言う John Doe や Richard Doe に匹敵する名前。訴訟で当事者の本名不明のとき法律家が用いる仮名。通例、第一当事者（原告）を前者で、第二当事者（被告）を後者の名で呼ぶ。この場合、Noaks は an oak を a noak と切り違えた上で生じたもの。

するためであって、何かの物語を築くためではない。人々を描くにあたって、詩人は彼らを名前のないままにしておけないのだ。チェスのゲームをするにあたっては、チェスの駒に名前を与えないでは始まらない。だが、私が思うに、一片の木片に司教という畏敬すべき名前を与えたために嘘をついていると言う人がいれば、その人は全くもって極端な事実偏重主義者ということになろう。詩人がキュロスとかアイネアースとか名付けるのは、彼らの名声と財産と境遇に恵まれた人が何を為すべきであるかを示すために他ならない。

【詩への非難③ 詩は罪深い空想である】

三番目の非難は、どれほど詩が人々の知性を淫らな罪業や肉欲的な愛へと誘惑して、それを汚すことが多いかということである。実を言えば、それは私がお前の申し立てを耳にすることができる唯一ではないが、聞き捨てならない主要な悪罵である。言うなら、喜劇は色恋の戯れを叱責するどころか、むしろそれを伝授する。言うなら、抒情詩は情熱的な十四行詩がちりばめられ、哀歌は愛しい麗人の不在を嘆き、延いては、英雄詩にまでも愛神が野心満々で登り詰めた⁶⁸。哀れ、愛神よ、願わくは、お前が他人を立腹させるのと同じように、うまく自己弁護ができるとよいのだが。お前の付き添う人々がお前を退けるか、もしくは、なぜおまえを側近くに置くのか十分な理由を提示することができればよいのだが。とはいえ、美を愛する心は獣的な欠点であると認めよう（美を識別できる才能を授与されているのは人間だけで、獣には欠けているから、それは困難極まることではあるが）。愛という愛す

68 キュービッド Cupid は、美と愛の女神ヴィーナス Venus の息子で、通常、裸体で弓矢を持つ子どもの姿で描かれる恋愛の媒介神。黄金の鏃の矢に当たると初めて見た人と恋をし、鉛の鏃の矢に当たるとその人を嫌悪するという。ギリシャ神話のエロス Eros に相当する。キュービッドが英雄的行動の世界に介入する模様を描くことがシドニー作『アーケイディア』の中心的主題の一つである。『詩への弁護』より前に書かれたとされる『オールド・アーケイディア』の中で、愛神の潜在的力の全般がムシドロスのピュロクレスへの説論としてこう描かれている。「実際、真の愛には、愛する者の本質そのものを彼を愛するものへと変形し、秘密の内なる作用でもってそのものと一体をなし、いわば合体させるという、あの秀でた性質がある。そしてこの中において、こうした類の愛は秀でたものを模倣する。なぜなら、天を愛することにより人は天人のようになり、美德を愛することにより有徳となるのと同様に、世俗を愛することによって人は世俗的になるのだから。このように女々しく、たかが女一人を愛することは男を非常に女々しくするから、もし君がそれに屈するようなことになれば、そのために君は有名なアマゾンの女になるばかりか、洗濯女や糸紡ぎ女、いや他の何でも構わない、およそ女たちの暇な顔で想像でき、か弱い手で出来る、卑しい仕事に就くことになるぞ。だから、僕の退屈だが愛情を込めた言葉でこれ以上君を苦しめないため、もし君が現在の君か、今までの君、あるいはそうならなければいけない君のことを思い出すか、それとももし君の心を動かすものが一体何なのか、どんな類の女性のために心を動かされているのかを考えてくれたら、きっとその原因は非常に些細、その結果は非常に危険、他ならぬ君がその結果に陥るのも、その原因に駆立てられるのも、極めて分不相応なことだと納得して君にその克服の仕方についてさらに忠告するよりはむしろ君が克服したことを称賛する機会に僕は必ずや早くありつけるだろう。」

べき名が、あらゆる憎悪に満ちた非難に値すると認めよう（私の師匠である哲学者の中には、美の卓越を披露するのに多量の灯火の油を費やしたものもいるが）。よろしい、人々が認めさせたいと望むものは何であれ認めよう。愛ばかりでなく、情欲も、虚栄も、お望みなら、下卑たことも、詩人の書物の多くの紙葉を占めていると認めよう。しかし、以上のことを認めたいうえで、それでもなお、私は思う、彼らには彼らの判決の文章は字句の順序を入れ替えた方が礼儀に則っていると分かり、詩が人の知性を汚すのではなく、人の知性が詩を汚しているのだと言うであろう。

と言うのも、「エイカステイケー⁶⁹」（学識者の中には「よきものを描出すること」と定義する者もいる）であるべき詩を、人間の知性が「ファンタステイケー」として、全く逆に、想像力をくだらない物象で汚してしまうものにしかねないということを、私は否定しようとは思わないからである。ちょうど画家が、優れた透視画とか、建築や築城のために適した精密な画像とか、その中に、例えば、我が子イサクを犠牲に捧げようとするアブラハム、ホロフェルネスを殺しているユディト⁷⁰、ゴリアテと戦っているダビデ⁷¹の著名な範例を含む卓越した絵を人の眼に提供するべきであるのに、そのような絵を蔑ろにし、隠蔽しておく方が望ましい事柄を淫らに見せびらかして、くだらぬ光景を喜ぶ眼を喜ばせるかもしれないのと同じことである。しかし、おやおや、あるものの悪用は、その正用を忌まわしいものにするであろうか。断じて、否である。詩は悪用されるかもしれないばかりでなく、実際に悪用されれば、その甘美な誘惑の力のゆえに、他のいかなる言葉の大軍よりも大きな害を為し得ることを認めるにやぶさかではないが、その悪用が悪用されたものを非難する根拠を与えると結論するのは早計であろうし、それどころ

69 **Eikastike** とは“imitative”の意で、「完璧な似姿の創造」のこと。**Phantastike** とは“fanciful”の意で、「類似の創造」のこと。この二つはプラトンの『ソフィスト』に現れる術語である。完璧な似姿と単なる類似との相違は、芸術家とソフィストとは完璧な物象を創作するのではなく、空想的幻像を扱うので、真実から二歩遠ざかるという結論に達することになる。とはいえ、シドニーの語法では、これらの用語は影像がそのモデルにどれほど近いかを説明するためではなく、「よきものの描出」と「価値なき対象」の提示との道徳的区別をするために利用されていることは、注目すべきである。

70 ユディト **Judith** は Apocrypha（経外典）の一つ *The book of Judith* の主人公。ペトユーリア **Bethulia** の美しいユダヤ人の未亡人で、新バビロニアの王ネブカドネザル **Nebuchadnezzar** (605-562BC) の軍が彼女の町を攻めたとき、敢然として敵であるアッシリア **Assyria** の猛将ホロフェルネス **Holofernes** を彼の陣中に襲い、色香で籠絡しその寝首をかいて殺し、ユダヤの民の危急を救った。（古英詩の *Judith* もこの話を歌ったもの。）

71 ゴリアテ **Goliath** は『旧約聖書』の「サミュエル記 上」に出るペリシテ人の大力無双の豪傑。彼の挑戦を受けたダビデ **David** はゴリアテに石を投げつけてこれを打ち殺した上、ゴリアテの腰から抜いた剣でその首を斬り落した。この一騎打ちは、古来、絵画、彫刻、文学などに数多く表現されてきた。

か、何であれ、悪用されたときに最大の害を及ぼすものは、正しく用いられれば（そして、何であれ正しい用い方をすることでそれ本来の称号を受けるのだが）、最大の善を為すと言えるのである。

医術（しばしば攻撃を受ける私たちの身体にとって最も信頼すべき防波堤）も、悪用されれば、最も激越な破壊者である毒を教えるではないか。法律の知識も、その目的は万事を平らにならし真っ直ぐにすることなのに、悪用されれば、恐ろしい害悪の邪な育ての親にならないであろうか。一気に最高の御座まで上れば、神の御言葉も悪用されると異端の邪説を生み、神の御名も悪用されると洗神とならないであろうか。実際に、縫い針は大した危害を加えられないが、（御婦人方のお許しを願って、憚りながら言う）、大した益にもならない。剣で父親を殺すこともできるが、剣で主君と祖国を守ることでもできる。こうして、詩人を嘘の父と呼ぶことにおいて、非難者は結局何も言っていないに等しいのと同じく、悪癖を云々することにおいて、実は贅辞を贈っているのだ。

これに添えて、非難者たちは、詩人たちが評価されるようになる以前には、我が国民は心の喜びを行動に置き、想像には置かなかった、為されるに適したことを書くよりは、むしろ書かれるに値することを為したと力説する。その以前の時というのがいつのことなのか、思うに、スフィンクス⁷²でさえいささか首を傾げそうである。どれほど古い記憶であろうとも、詩に先立つほど古い記憶は存在しないからである⁷³。そして、これは確かなことであるが、極めて平易で素朴な形ではあれ、これまで一度たりともアルピオン⁷⁴の国民に詩が欠けたためしはなかった。いや、実を言えば、この議論は、その筒先を詩に向けて構えてはいるが、本当は、学問一切に、あるいは普通に使われる呼び名で言うと、読書三昧の銜学主義に打ち込まれた鎖弾⁷⁵である。ゴー

72 **Sphinx** 古代オリエント神話に出る人間の頭（女の上半身）とライオンの胴体を持つ怪物。ギリシャ神話に出る怪物。エジプト起源で、シリア、フェニキア、バビロニア、ペルシャ、ギリシャなどで古くから知られていた。最古の像はエジプトのギザの大スフィンクスで、長さ73.5 m、高さ20 m、顔幅4 mという巨大なもの。額に王権の象徴である蛇形象を付けている。またギリシャでは幼児をさらう怪物と考えられ、女神ヘラがテーベThebesに送ったスフィンクスは、テーベの入口付近にいて通行人に「朝は四脚、昼は二脚、夜は三脚で歩くものは何か」という謎をかけ、その謎を解けなかった人を殺したと伝えられる。オイディプス Oedipus は「それは人間である」とその謎を見事に解いたために、スフィンクスは死ぬが、彼はテーベの王に迎えられた。シドニーは超人間的な知識の持ち主という意味でスフィンクスに言及しているらしい。

73 シドニーは本論の前述の箇所、詩人は最初の歴史家であったと、すでに主張していた。

74 **Albion** はブリテン Britain の古名で、後にイングランドの雅称。「白い国」の意味で、南部海岸（ドーヴァー Dover の切り立った絶壁など）の白亜の断崖を見たローマの兵士たちがそう命名したと言われる。

75 **chain-shot** 発射されると目標に巻き付くように意図された、二つの弾丸を鎖で連結した砲弾。

ト人⁷⁶のある人々も同じ考えで、ものの本によると、とある名高い都市を略奪した際に、ある立派な図書館を押えたとき、これまで多数の人体を縊死させていた一人の首吊り役人が（どうやら人々の知性が産み出した果実を処刑するのに適任らしく）それに火を付けようとした。「やめろ」と、もう一人が厳粛に言った、「よく考えて行動しろ。奴らがそれらのくだらない学問に精を出している間に、我々はいっそう易々と奴らの国を征服できるではないか」。このように、読書が時間の浪費ということは、実際、普通に説かれる無知の勧めであり、多くの言葉がそのことに費やされるのを私も時々は耳にしてきた。しかし、この理屈は、詩を初めとする学問一切に、いやむしろ、詩を除く学問一切に、押し並べて異論を唱えることになる。その問題を扱うとあまりに大きな脱線となるか、あるいは、少なくとも、あまりに余計な論になるであろう。（行為へのあらゆる抑制は、知識から得られるべきであり、知識は多くの知識を集積すること、すなわち、読書によって最善に得られるべきものであるからだ⁷⁷。）だからこそ、私は、そういう意見の方に対しては、ホラティウスとともに、こう申し上げたい、「彼に愚かなままでいるように嬉々として勧める⁷⁸」と。何故と言うに、詩自体に関して言えば、詩はこの反論から最も自由であるからである。

先ずもって、詩は戦陣の友である⁷⁹。推察するに、『狂乱のオルランド』⁸⁰や有徳のアーサー王⁸¹が軍人の気に入らないことはないであろう。しかし、原

昔は海戦で敵艦の索具を切ったり、帆柱を破壊するのに用いられた。

76 **Goths** ゲルマン民族の一種族で、267年にアテネを篡奪し、紀元3-5世紀に東西両ローマ帝国に侵入してバルカン半島を奪い、その後東西ゴート王国を築き、今日のイタリア、フランス、スペインの起源を作った種族。西ゴート諸王は、ローマ系住民とゴート人との融和に努め、ローマ・ゲルマン両方の要素を組み合わせた『西ゴート法典』を編纂するなど、画期的な業績があるが、ヴァンダル族 (Vandals) と共に、学芸を破壊する蛮族の代表とみなされた。

77 『アーケイディア』の中で、ムシドロスが片意地になった親友のピュロクレスに同じような趣旨の意見を述べて、彼を論そうとする場面がある。

78 ホラティウス『諷刺詩』I.1.63より。

79 『アーケイディア』における二人の王子たちの教育が正しくこの主張の例示となっている。

80 **Orlando Furioso** イタリアの詩人アリオストの長編叙事詩 (1516, '32)。Orlando (Rolandのイタリア名) はシャルルマヌシュ Charlemagne 帝に仕えた騎士。大帝の旗下にあって、パリを囲んだアグラマンテの従えるサラセン軍との戦いを背景に、英雄オルランドと美女アンジェリカ Angelica の悲恋と、勇将リナルドの妹ブラダマンテと王子ルッジェーロの恋を中心にして、戦乱に次ぐ戦乱の果てにキリスト教側が勝利を収める経緯を描く。オルランドはアンジェリカがムーア人メドロ Medoro と結婚したことを知って一時狂乱の有様になったが、のちに奮戦して敵の大將を討ち取った。厳格な八行韻詩で、ルネサンス期イタリアの代表作とされる。

81 **King Arthur** 古代ブリトン人の王で、紀元6世紀に実在したとも言われるが、むしろ伝説的人物。テムズ河中流より侵入して来る西サクソン族を撃退するため、ウェールズのブリトン諸族を結集させ、各所で勝利を博しキリスト教を擁護した。中世西ヨーロッパの一大叙事詩群「アーサー王伝説」として英雄物語の主人公となった。

存在の本質とか存在の可能態⁸²とかは、胴鎧⁸³とはさほどしっかりと合わないであろう。そういう次第で、初めに申した通り、トルコ人やタタール人⁸⁴でさえ、詩人たちに喜んだのである。ギリシャ人のホメロスは、ギリシャが繁栄する前に栄華を極めた。詩が男性読者を女々しくしたとする根拠薄弱な推測に一つの推測を対置できるとするならば、実は、ホメロスによってその国の学識者たちが彼らの知識の最初の光明のほとんどを得たのと同じく、その国の行動する人々は彼らの勇気の最初の動力源を受けたと思われる。その例示としては、アレクサンダー大王の例を一つだけ挙げれば、足りるかもしれない。彼は、プルタルコスに拠れば⁸⁵、極めて有徳の士であり、運命の女神を彼の導き手ではなく足台にしたほどで、たとえプルタルコスが彼のために弁じなくとも、彼の行為そのものが彼を代弁し、実に、尚武^{しょうぶ}の君主たちの中で不死鳥⁸⁶と評価されている人物だ。このアレクサンダーは、彼の教師である、生けるアリストテレスは現地に残したが⁸⁷、死せるホメロスは戦地へと一緒に連れて行った。彼は哲学者カリステネス⁸⁸を、彼の一見哲学的、実は反抗的な頑固さゆえに処刑した一方で、彼が熱望したと伝えられる唯一主要なことは、ホメロスが生きていてくれればということであった。彼は豪胆な精神を、剛毅の定義を耳で聞くよりは、アキレスの手本によっていっそう学べることを十分に悟った。それゆえ、詩人エンニウスを戦場へ携えたとしてカト

82 quiddity (本質)、ens (原存在)、prima materia (存在の可能態) というスコラ哲学の精巧な言葉遣いを、シドニーは茶化している。

83 胴体を守るために設計された鎧の一部。

84 Tartars ウラル山脈の西、ボルガ川とその支流カマ川の流域に住むチュルク語系の一族。14世紀以来イスラム教徒となり、キリスト教徒にとっては、トルコ人とともに夷狄とされた。

85 プルタルコス『モラリア (アレクザンダーの運命あるいは美德について)』の中で、アレクザンダーの幸運ではなく、彼の美德こそが出来事の命運を決定づけたと論じている。

86 古代エジプトの太陽崇拜と関連する伝説上の霊鳥。鷲と同じ大きさで、羽は燃えるような緋と金で、美しい声で鳴き、500年以上生きるが、一度に一羽のみ存在する。寿命が尽きるとき、みずから香木を積み重ねて焼死し、その灰の中から再び若い姿で現れると言われる不死鳥であるが、ここでは転じて paragon (典型、模範、雛形) の意味に用いられている。

87 アリストテレスは 343/2B.C. にマケドニアのフィリップ Philip 王に招かれて、王子アレクザンダー Alexander (のちの大王) の教師となり、大王がアジア遠征に出た 335B.C. にアテネに帰った。プルタルコスに拠れば、アレクザンダー大王はホメロス『イーリアス』の大ファンで、それを戦士としての規律を教示する有用な案内書と考えていたという。

88 Callisthenes (? 327BC) アリストテレスの甥で弟子。アレクザンダー大王の遠征に従軍戦記作者として従ったが、大王に対する陰謀に加担した嫌疑をかけられて 327B.C. に処刑された。著書『ギリシャ史』、『アレクサンドロスの事績』があるが、現存しない。デルフォイの祭典競技の記録を整理して年代表を作成した彼の功績を称える碑文が現存している。

一⁸⁹がフルヴィウス⁹⁰を嫌ったとしても、こういう答えができるかもしれない。カトーはそれを嫌ったにしても、高貴の士フルヴィウスはそれを好んだ、それでなければ、そんなことはしなかったであろうと。カトーとは言っても、それは卓抜の士カトー・ウティケンシス⁹¹（この方の権威に対しては、はるかにもっと敬意を払ったであろうが）ではなくて、その前のカトー、実際に、罪を厳しく罰した人であるが、それ以外にも、真善美の三女神⁹²に一度たりと犠牲をまともに捧げたことがない人物であった。彼はギリシャの学問一切を毛嫌いし、それに非を鳴らしたが、^{よわい}齢八〇に達すると、もしかして地獄の魔王ブルート⁹³はラテン語を解さないのではないかと心細くなり、ギリシャ語を学び始めた。実際に、ローマの法律は、軍籍に入っていない者を戦場へと連れて行くことを許可していなかった。従って、カトーは軍に召集されていない者が出征することを嫌ったが、その者の仕事を嫌ったわけではなかった。たとえカトーが嫌ったとしても、スキピオ・ナシカ⁹⁴、衆目の一致により最善のローマ人と判断された人は、エンニウスを愛した。他の二人のスキピオ兄弟⁹⁵、彼らの美德によって他ならぬアジアとアフリカの名を各々の姓に加

89 **Cato Cato the Censor** (234-149B.C.) については、前注 53 を参照。次に出る **Cato Uticensis** の曾祖父で、前者を **Cato the Elder** (大カトー)、後者を **Cato the Younger** (小カトー) と呼ぶ。とはいえ、シドニーも下に記しているように、晩年に至って彼もギリシャ語を学びはじめた。サルディニア **Sardinia** に執政官となっていたころ、百人隊長 **centurion** としてローマ軍に従いたエンニウス **Ennius** を知った。エンニウスをローマへ連れて来たのは彼であった。

90 **M. Fulvius Nobilior**。ローマの将軍。189B.C. にアイトリア **Actolia** を討ち、ローマの執政官になった。エンニウスはこの長征に従い、そのときの功によってローマ市民権を与えられた。

91 古代ローマの政治家(95-46B.C.)。大カトーの曾孫。共和制護持に務めた元老院の保守的貴族で、ユリウス・カエサルに政敵。前 49 年カエサルに対して立ち上がった元老院とポンペイウスに味方し、敗れてアフリカのウチカで自害。死後、キケロが彼に賛辞『カトー』を贈ると、カエサルは『反カトー論』を書いて激しく反駁。後世には、清廉潔白、高德の士と称えられた。

92 ギリシャ神話に出る三人姉妹の女神で、ゼウスの娘とされ、自然と人間にあるすべての美を象徴する。ギリシャ語では「カリテス」(**Charites**) と言う。三姉妹は、輝き (**brilliance**) をあらわす **Aglaiā**、喜び (**joy**) をあらわす **Euphrosyne**、開花 (**bloom**) をあらわす **Thalia** のこと。ここでは、シドニーは芸術に対してカトーが無関心であったと伝えられることに言及している。

93 天の主神ゼウス (ジュピター) の兄だが、ティターンたちとの戦いに勝利した後、籤を引いて世界を分かち合い、天上はゼウスが、大洋はポセイドンが、冥界はブルート (別名ハデス **Hades**)。ハデスは彼の領土すなわち冥土のことも指す) が支配することになった。ゼウスが豊穡の女神デメーテルに産ませた娘ペルセフォネを、ゼウスの同意の下に地上から掻っ攫って冥界の王妃とした。額に一眼がある巨人族のキュクロプスたちから贈られた、それを被ると姿の見えなくなる兜を所有するという。

94 ローマの名門に生まれた将軍・政治家。204B.C. に元老院によって「ローマ最良の市民」と宣せられ、191B.C. に執政官。元老院での彼の人気については、リヴィウス『歴史』の中に言明されている。しかし、スキピオ一族の没落の中で戸口総監選に敗退し、政治生活から引退した。

95 204B.C. にアフリカのザマ **Zama** でハンニバル **Hannibal** を破って第 2 ポエニ戦争を終らせ、アフリカヌスの別称を与えられた **Scipio Africanus Major** (大スキピオ) と、兄の協力を得て 190B.

えているが、その二人ともにエンニウスを深く愛し、彼の遺骸を自分たちの墓所に埋葬させたほどである。このように、カトーがエンニウスを嫌ったのは、彼が詩人であるからではなく、徴集されない一市民として不法に軍に同行したからであり、かつまた、彼の異議申し立ては、彼よりはるかに権威のある者によって覆されているので、この場合には何ら有力な力もなく、詩人嫌いの輩なかが彼らの言い分を支持してもらおうと彼の権威を持ち出しても、何の役にも立たない。

【詩への非難④ プラトンは詩人を追放した】

さて、今度はいよいよ私の荷が重くなる。プラトンの名が私に押し掛かっているのだが、白状すると、彼こそは、すべての哲学者の中で最大の敬意を払うに値すると私は常々評価してきたし、しかもそれにはもっともな理由があり、彼はすべての哲学者の中で、最高に詩人的な人なのである。とはいえ、彼の清流がそこから発した水源の泉を彼が汚し冒瀆しようとするのであれば、いかなる理由で彼がそれしたのか、臆せず調査してみよう。

実は、第一に、プラトンは哲学者であったから、生来、詩人の敵であったと、意地悪く反論する人がいるかもしれない。なるほど、哲学者たちは詩歌の甘美な神秘の中から物事を正しく見分ける知識の真の要点を拾い上げると、直ちにそれを方法化し、詩人たちがひとえに神韻漂う喜びによって教えたものを学問的に規律化し、忘恩の徒弟さながら彼らの導き手であった詩人を足蹴あしげにして、独立して自分の店を構えるだけでは満足せず、ありとあらゆる手段を駆使して彼らの親方の信用に泥を塗ろうと励んだからだ。しかるに、彼らは楽しませる力を持つことを阻まれてしまい、そのために詩人たちをうまく凌駕することができず、それだけいっそう詩人たちを憎んだのである。実際に、彼らに分かったことは、どの都市がホメロスを市民として迎えるべきかを七つの都市が競い合った、その一方で、多くの都市が哲学者たちを市民として一緒に住むには不適切として追放したことだった。エウリピデスの韻文の数節を復唱しただけで、多くのアテネ市民がシラクサ人から命を助けられたその一方で、当のアテネ人たちは多くの哲学者たちを生きるに値しないと

C. に小アジアに遠征し、アンチオコス三世 Antiochus III を破った Scipio Asiaticus (名は Lucius) 兄弟のこと。ローマでは、勲功のあった人にその勲功を記念するにふさわしい surname を贈るならわしがあった。

考えた⁹⁶。シモニデス⁹⁷やピンダロス⁹⁸のごとき何人かの詩人たちは、ヒエロン一世⁹⁹を説き伏せて、ついには暴君であった彼を正しい国王に仕立て上げた。これに比して、プラトンは、ディオニュシオス¹⁰⁰に対してほとんど何も対処しえず、ついには彼自身が哲学者から奴隷にまで身をやつした。しかし、このような議論を展開する者は、正直に言うと、詩人に対して為された告発に返報するために、哲学者に対してケチなあら捜しをする者と断じてよい。同様に、プラトンの『パイドロス』¹⁰¹や『饗宴』¹⁰²を、あるいはプルタルコスの恋

96 ペロポネソス戦争中の415-3B.C.にシシリー島南東部の町シラクサへ遠征したアテネ軍は敗北し、多数のアテネ人が捕虜になったが、彼らの捕獲者たちが高く評価していたエウリピデスの詩句を暗唱できたために解放された人たちのいたことを、プルタルコスが述べている。エウリピデス Euripides (c.480-406B.C.)はギリシャ三大悲劇詩人中の最後の人で、ソフィストと自然哲学の影響を受け、伝統的悲劇を合理主義精神によって改革し、神話の世界を日常の世界にまで引き降ろし、悲劇を人間情緒の世界と化した。競演における優勝は前441年以来5回20編に及ぶ。現存する作品は19編。『アルケルチス』、『メディア』、『トロイアの女たち』、『アンドロマケ』、『ヘラクレス』、『パッコスの信女たち』その他多数の悲劇作品を残している。

97 **Simonides** (c.556-c.468B.C.)はギリシャ最古の抒情詩人の一人。ギリシャで初めて報酬を取って作詩した詩人と言われる。アテネの宮廷に招かれて客人として滞在し、競技祝勝歌、諸々の祭儀の合唱歌を作った。前490年ペルシャ戦争に際して、マラ톤の戦いに倒れた戦士の墓碑銘を書いたのを初め、ギリシャ軍の数々の勲功を称える詩を作った。後にシシリー Sicily に隠退し、前476年頃シラクサ Syracuse の王ヒエロン一世 Hiero (or Hieron) I の宮廷に留まり、そこで死んだと言われる。合唱隊歌と墓碑銘の他にエレゲイアもあったが、現存する作品は、わずかな抒情詩断片と、真偽のほどが必ずしも定かでない多くの墓碑銘を集めた『シモニデス集』のみである。

98 **Pindarus** (518?-438?BC)ギリシャ最高の抒情詩人。名門に生まれ、アテネに学び、各地の貴族や僧主に招かれ、注文に応じて合唱隊歌を作詩した。昂揚する思想と大胆な比喩と崇高な言葉によって運動競技における優勝者を称える彼のエピニキオンは争って求められた。完全な形で現存するのは『競技祝勝歌』のみだが、他に多くの断片が伝わる。前476年、ピンダロスはシラクサのヒエロン一世の宮廷に赴き、王の偉業を祝賀する数編の詩を書いた。

99 **Hiero the first** は、シラクサ Syracuse の霸王 (478-467B.C.)。Mt. Etna の麓に新都市エトナ Aetna を建設し、シチリアでの覇権の強化を図った。その支配は専制的ではあったが、文藝を保護し、ピンダロスによってその栄光を歌われた。シモニデスやピンダロスのほかにアイスキュロス Aeschylus も一時彼の宮廷にいたことがあり、歓待を受けた。

100 ディオニュシオスは前367年にシラクサの暴君として王位を継承した。プラトンは疑い深いディオニュシオスを理想の君主に作り変えるべくシシリーへ召喚されるが、その実験は完全な失敗に終り、急遽逃げ帰ったという苦い経験がある。また、その数年後、一時的に投獄されたこともあった。

101 **Phaedrus** プラトンの中期の対話篇。ソクラテス Socrates が若い友人パイドロス Phaedrus と rhetoric の問題を論ずる。副題「美について」あるいは「愛について」。第一の主題は『ゴルギアス』と深い関わりのある弁論術のロゴスの性格の吟味であり、別の主題は『饗宴』や『イオン』と密接な関係に立つ神的な狂気としての愛の問題である。これらの主題と切り離せない哲学者の定義、方法の問題、ロゴス(言語)の問題、魂の輪廻や不死の説明などもある。靈魂は二頭の馬[精神と官能]を操る駁者であるという有名な比喩はこれに出る。

102 **Symposium** 前383年の作と推定されるプラトン壮年期の対話篇。若い悲劇詩人アガトンの祝勝宴における列席者のエロス賛美の演説という構成を取る。この中でソクラテスは六番目に巫女ディオティマから聞いた話としてエロスの本性について述べ、エロスこそが認識活動の原動力であり、

愛談義¹⁰³を読んで、非難者たちがするように、忌まわしく不潔な醜悪にお墨付きを与える詩人がいるかどうかよく見よと言うのも、やはり同じ穴のムジナということになろう。

更に、プラトンはいかなる共和国から詩人たちを追放したのかを問い掛けてみるのも一計ではないか。実を言うと、プラトン自身が女の共有を許している国¹⁰⁴から、詩人は追放されたのである。これを勘案すれば、どうやらこの追放は、軟弱な性的放縦と組討するために課せられたのではらしい。男が女をより取り見取りである時に、十四行の恋愛詩が害を及ぼすとは考えにくいからだ。とはいえ、私は哲学の教えを尊び、それらを生み育てた知者たちを祝福するがゆえに、それらが悪用されるのは嫌であり、同じ思いが詩にも及ぶのである。

他ならぬ聖パウロ¹⁰⁵（彼は詩人の正当な評価のために二の二倍の詩人たちを引合いに出し、内一人を預言者と呼ぶ）が哲学について、実は、哲学の悪用について警鐘を鳴らしている。同様に、プラトンが警告を発するのは、詩に対してではなく、詩の悪用に対してなのだ。そもそもプラトンが非を鳴らしたのは、同時代の詩人たちがあの清浄無垢の實在について軽薄な物語を作り、神々について誤った考えで世の中を満たし、従って、若者たちがそのような浮薄な考えで墮落するのを見て見ぬ振りができなかったからである¹⁰⁶。この論点に関しては、多弁が費やされるかも知れないが、今はこれだけでよしとしよう。すなわち、詩人たちがそのような考えを誘発したのではなく、すでに誘発されたそのような考えを模倣したのだ。なぜなら、数々のギリシャの物語を読めば、当時の実際の宗教は多数の、多様な神々を基盤にして成立していたことを十二分に立証できるが、詩人たちの方からそう教えて幻想を再現したのではなく、彼らは彼らの模倣の本性に従って追随したまでであ

対象としての美のアイデアを目指すものであるとしている。ここでシドニーは、これらの作品における公認された同性愛に言及している。

103 おそらく、ブルタルコス『アマトリウス』に言及している。性愛に関する議論が交わされるが、結局は、異性愛に軍配を上げるという結論に達している。

104 『国家』*Republic* でソクラテスは理想国の守護者たちは妻と子供を共有するべきであると説明している。

105 *Epistle to the Colossians* (『コロサイ書』) ii, 8. “Beware lest any man spoil you through philosophy and vain deceit, after the tradition of men, after the rudiments of the world, and not after Christ.” を参照。Olney 版では、ここは、“Saint Paul himself, (who yet for the credit of Poets) allegeth twice two poets, and one of them by the name of a Prophet, setteth a watchword upon Philosophy” となっている。

106 プラトンの異議申し立ては、彼の『国家』IIに見られる。そこで彼は、子供たちが彼らの宗教観を、神々を不道徳として描いたホメロスやヘシオドスのような詩人たちから引き出すと論じている。

る。お望みならば、プルタルコスの中にあるイシスとオシリスの説話¹⁰⁷、神託が途切れた理由の説話、神の撰理の説話を読めば、その国民の神学がそのような夢物語を基盤にして成立していなかったかどうか、その夢物語を詩人たちは実は異教の神々を信仰して迷信的に遵守したのではないか、きっと分かるであろう。そして実際、キリスト以前の話なので、彼らにはキリストの光が射していなかったのだから、それを遵守したことで哲学者たちよりはずっと立派なことをした。哲学者たちは迷信を篩い落とすと同時に、無神論を導入したからである。

従って、プラトン（私は彼の権威に不当に抵抗するよりは、むしろ正當に解釈したいのだが）は、ユリウス・スカリジエールが「野蛮で鈍感な人々は詩人を共和国から追放するために彼の権威を悪用したいと願うであろう」と評釈する彼の言葉によって、詩人一般を意図したのではなく、ただひとえに神なるものについての誤った考えを追い出そうと意図したのである。プラトンの考えでは、恐らく、当時評判の詩人たちによって^{はぶく}育まれたとされたその神なるものへの一切の有害な信仰は、今日では、それ以上の猶予もなく、キリスト教に一扫されてしまっている。それに加えて、プラトンの込めた意味を知るためにプラトンその人を超えて遠くまで行く必要はない。彼は、『イオン』¹⁰⁸という対話篇の中で、高尚な、正しく神々しい賛辞を詩へと献呈している。かくして、プラトンは、詩そのものではなく、詩の悪用を追放し、詩そのものを追放したのでなく、詩にふさわしい敬意を捧げたのであり、私たちの庇護者でこそあれ、決して私たちの敵対者ではないのである。かく言う私は、実を申せば、プラトンの権威に物申す仕事に関わるよりは、彼の獅子の皮を着て驢馬のごとく耳障りに嘶き、詩に対して悪態の限りを尽くす輩

107 プルタルコスの『モラリア』*Moralia*の中に“Osiris and Isis”と題する一篇がある。オシリスは古代エジプト神話の主神。自然の生産力の男性的原理をあらわし、雄牛アピス *Apis* の姿をとる。神話によれば、エジプトの「よき存在」として善政を行い、慈愛により地方を支配し、神々を礼拝することと農耕の正しい法を教え、王として民の教化をはかったが、弟のセト *Set*（暗黒と悪の神）によって殺され、五体を切りぎざまれた。オシリスの妹でありかつ妻であったイシス *Isis* は、オシリスの死骸の断片を集めて埋葬したのち、息子ホルス *Horus*（太陽神）と力を合わせてセトに復讐した。かくして、オシリスは死者の国の神とも、またホルスを介して再生の命の根源とも見なされるようになった。

108 *Ion* は、古代ギリシャでホメロスの詩を暗唱して生計を立てた人々、*rhapsodes* (or *rhapsodists*) の思い上がりを調刺した一篇。イオンとは一人のラプソドスの名。この中で、ソクラテスは神憑りの靈感の原理を概説し、神々は特定の詩人たちを彼らの神的言説のための道具として利用すると述べている。1589年に出版された『英詩の技法』*The Arte of English Poesie* で、バトナム *George Puttenham* は「完璧な詩の技術は自ずと育つのではなく、プラトン主義者が〈愚依 *furor*〉と呼ぶ何かしら神憑りの天稟によって生まれる」と主張する。そのような審美学は明らかにシドニーの模倣理論とは矛盾するが、プラトン擁護の取っ掛かりをシドニーに与えてはいる。

が仕出かす、歪んだプラトン曲解を白日の下に晒したい（実際、私にはそれができると思われる）。プラトンという哲学者は、当方が賢ければ賢いほど、ますます彼を称賛すべき正当な理由が見つかる人である。とりわけ、彼は私自身がする以上のことを詩に帰せしめている、すなわち、上掲の対話篇¹⁰⁹に明らかなように、詩とは人智がはるか及ばないほどに神的な力を吹き込むものに他ならないものと評価しているのである。

他方で、最善の判断力に恵まれた人々によって詩人たちに付与された栄誉の数々を示したいと望む人々には、山ほどの事例に事欠かないであろう。数多^{あまた}のアレクサンダー、カエサル¹¹⁰、スキピオの類の人々がみな、詩人たちの愛好者であった。ローマのソクラテスと呼ばれたラエリウス¹¹¹は、彼自身が詩人であり、テレンティウス作『ヘオートンティモルメントス（自虐者）』¹¹²の一部は彼の手になるものとされた。アポロンが唯一の賢人とお墨付きを与えたギリシャのソクラテス¹¹³でさえも、イソップの寓話を韻文に直すことに晩年の一部を費やしたと言われる。従って、彼の弟子のプラトンが彼の師の口を借りてあのような詩人排斥の言葉を吐いたのは、全く解せない話ではある。とはいえ、これ以上の駄弁を弄する必要があるか。アリストテレスは『詩学』を書いた。もし、詩が書かれてはならないものであれば、なぜなのか。プルタルコス¹¹³は詩人たちから摘み集められる利益を伝授したが、彼らが読まれるべきでないとしたら、どうしてなのか。そして、プルタルコスの

109 『イオン』のこと。プラトンが彼の理想国から詩人たちを追放しなかったと結論する点では、シドニーは確かに勘違いしている。彼は困難な問題を最大限に利用しようとしているのか、もしくは、間違った情報を利用しているかであろう。

110 幾人かのカエサルたちが詩に関心を寄せたが、中でも、アウグストゥス・カエサルがウエルギリウスを厚遇したことが最も人口に膾炙した例であろう。

111 **Laelius Sapiens, Gaius** (born. c.186B.C.) 古代ローマ、平民出身の軍人。小スキピオ Scipio Aemilianus Minor の親友で、前 140 年には執政官。第 3 ポエニ戦争においてスキピオの下で軍功を立てたほか、弁論にすぐれ、豊かな学識と哲学的教養を有し、“Sapiens” (= the Wise) という surname を与えられた。グラックス兄弟の改革に反対し、改革派弾圧に一役買った。詩やギリシャ哲学を愛好し、ローマの喜劇作家テレンティウス Terence とはスキピオを中心とする文文学者の集まりにおいて仲間であり、テレンティウスの劇は彼に負うところが大きいと言われている。キケロの対話篇 *De Amicitia* (『友情について』) と *De Senectute* (『老年について』) の登場人物の一人でもある。

112 **Heautontimorumenos** Heauton Timorumenos と分けて書くこともある。The Self-tormentor (自らを苦しめる者) の意。古代ギリシャの喜劇作家メナンドロス Menander (c.342-c.292B.C.) の同名の劇をテレンティウスが改作したもので、163B.C. に初演。息子の恋を裂いたことを悔いて自ら苦行の日々を送る父親 Menedemus が劇の題名の役を演じる。

113 デルフォイの託言がソクラテスを人間の中で最高の賢者と宣言した話は、プラトン『ソクラテスの弁明』で語られる。彼の死の直前にソクラテスのとの対話を記録したプラトンの対話篇の一つで、靈魂の不滅について論じる『パイドン』で、ソクラテスはイソップの寓話を韻文に直しているのは、度重なる夢にそうするように促がされてのことだと語っている。

歴史やら哲学やらを読む者は、彼がそれらの衣装を両方とも詩歌という装飾品で整えていることを知るであろう¹¹⁴。しかし、私は、詩を彼女の目下である歴史の助けを借りて擁護したいとは思わない。詩は、賞賛が永住するに適した土地であると述べることで、今は十分としよう。詩を誹謗中傷しようとするいかなる試みも、たやすく鎮圧されるか、もしくは、正当な賞賛に転換されるという一事を以て、よしとしたい。

【詩への非難への反駁の要約と第二部の終了】

以上のごとく、詩の秀でた諸特性は、それほど容易くそれほど正当に確認されるし、地面を這うがごとくちまちました異議申し立ては、さっさと踏み潰されてしまうし、詩は嘘をつく技芸ではなく真の教理であり、女々しさの教えではなく勇気を著しく鼓舞する教えであり、人の知性を悪用するのではなく強化する教えであり、プラトンによって追放されたのではなく敬慕された教えであるがゆえに、詩を口汚く罵るそのような^{けな}貶し屋たちの不快な息が詩の清澄な泉に吹き掛けられるのを許すよりはむしろ、私たちの敬慕する詩人たちの頭上に飾る冠とすべく月桂樹をもっとたくさん植えようではないか(月桂樹の冠を戴くというこの誉れは、彼ら詩人たちの他には凱旋将軍にしか与えられない儀式なので、彼らが授与されるべき尊敬を示すに十二分にふさわしい権威となるものだ)。

【イングランドの文学事情① 詩と詩人について】

さて、しかし、私はこの問題でかなりな長丁場を走って来たので、筆の走りを完全に止める前に、あまたの傑出した精神の母であるイングランドが、何故に詩人たちに対してはこうも冷酷無情な継母になったのかを探究しても、さほど時間の無駄遣いにはならないと思われる。詩人たちが作る一切は、ひとえに彼らの知性から産れ出るのであり、他人から盗むのではなく、実際に自ら作り出すゆえに、知性において確実に他のあらゆる者たちに抜きん出ているというのに。私にしてみれば、どうして声を限りに叫ばずにおれようか、「おお、ミューズ神よ、何故に御心が傷つけられたか、何を憤ってのことか、その理由を知らしめ給え¹¹⁵」と。

甘美なる詩、古には国王、皇帝、元老院議員、偉大な将軍、例えば、他の多数の有象無象はさておき、ダビデ、ハドリアヌス¹¹⁶、ソフォクレス、ゲル

114 プルタルコス著作で後世に残ったものは『英雄列伝』と『モラリア』(論文83篇)とである。

115 *Musa, mihi causas memora, quo numine laeso?* ウェルギリウス『アエネーイス』第1歌8行。シドニーはここでこの一行を利用して、彼の時代のイングランドにおける詩の窮状の理由は何かを問いつけている。

116 *Adrian or Hadrian* (A.D.76-138) ローマ皇帝(117-38)で五賢帝の一人。軍人、為政者、旅行

マニクス¹¹⁷は、詩人に恩顧を与えただけでなく、自ら詩人になろうとした。そしてもっと近い時代においては、詩の庇護者として、以下の人々を掲げることができる。シシリー王、ロバートなる人物¹¹⁸、フランスの偉大なるフランソワ王¹¹⁹、スコットランドのジェイムズ王¹²⁰、ペンブス¹²¹やビビエナ¹²²のごと

者、文人、ギリシャ学者で、学芸の庇護者を兼ねた多才の人物。辺境のブリテン島には有名なハドリアヌスの防壁 *Hadrian's Wall* (*Solway Firth* から *Tyne* の河口まで、今日の英蘇の境界付近を東西に走る防壁) を築いた。アテネを愛し、オリュンピア、ゼウスの神殿を造らせ、エルサレムには新市アエリア・カピトリナを建設。同性愛の愛人アンチノースの死後、エジプトに新市アンチノポリスを建設し、祭儀を行わせた。晩年はローマ近郊チボリの広大な別荘に引き籠もった。彼の詩文では、臨終の床で自分の魂に呼びかけた一篇が有名。

117 **Germanicus, Julius Caesar, Nero Claudius** (15 B.C.-A.D.19) ティベリウス *Tiberius* 帝の甥で、養子。12年執政官となり、ライン地方軍の司令官としてゲルマン諸部族と戦った。シリアで急死する前は、ローマ市民に絶大な人気を博した。ギリシャの天文詩人アラトス *Aratus* の『現象』*Phaenomena* と『前兆論』*Prognostica* とをラテン語の韻文に訳したり、何篇か自作の詩があるが、後者の大半は消失した。

118 **Robert II of Anjou** (1275-1343) のこと。1309年から1343年までナポリ王。芸術の愛好家として、ペトラルカ *Petrarch* やボッカチオ *Boccaccio* の庇護者として命名を馳せた。

119 **Francis I** (1494-1547. 在位 1515-47) のこと。イングランドのヘンリー 8 世と同世代として多くの点で重なるフランス王で「大王」の異名を取る。即位と同時にシャルル 8 世以来のイタリア政策を引き継ぎ、北イタリアに出兵し、成功を取めた。神聖ローマ皇帝の位を要求してカルル 5 世に敗れた。国内では、行政機構や徴税制度の整備、高等法院の再組織など、貴族・教会の権力を削減して王権の強化に努め、絶対王政の確立に向かって歩を進めた。豪華な宮廷生活を営み、学芸の保護に当たり、イタリアから導入された雅びな文化はフランス・ルネサンスとして開花した。チェリーニ *Cellini*、ダヴィンチ *Leonardo da Vinci*、ラブレール *Rabelais*、スカリジエール *Scaliger* その他の庇護者。

120 『シドニー詩集』の編者リングラーは、ジェイムズ 6 世、後のイングランド王ジェイムズ 1 世 (1566-1625) のことだと示唆するが、シドニーがこの詩論を書いていた当時、ジェイムズはせいぜい 10 代半ばなので、これはおかしい。恐らく、James I (1394-1437. 在位 1406-37) のことであろう。ヘンリー 4 世に敗れて、その治世の初めの 18 年間をイングランドに捕われの身となっていた間に、John of Gaunt の孫娘 Lady Jane Beaufort を見染めて妃とした。彼女に対する愛の詩集『王の書』*The King's Quair* は幽閉中に書かれたとされる。“Scottish Chaucerians”の一人。スコットランドに帰国して王権強化のため司法、行政、教会制度の改革に着手したが、貴族の反感を招いて暗殺された。

121 **Pietro Bembo** (1470-1547) のこと。イタリアの人文学者・詩人で、枢機卿。初期ルネサンス文化の代表者の一人。ペトラルカ、ボッカチオの用いた言語を文章語の基礎にすることを主張した『俗語の散文』*Prose della volgar lingua* (1525) は、最初のイタリア語文法書。ルクレチア・ボルジア *Lucretia Borgia* の愛人。対話形式の恋愛論『アラゾーニ』*Gli Asolani* ははじめ多くの詩を書いた。カスティリオーネ『宮廷人の書』の主要登場人物の一人。

122 **Bibbiena** (or *Bibiena*); **Bernardo Dovizi** (1470-1520) のこと。イタリアの詩人。ラファエル *Raphael* の友人。枢機卿 *Giovannde*, *Medici* の秘書をつとめ、のちに彼自身も枢機卿になった。プラウトゥスを基にした喜劇 *Calandria* (1512) の作者。スベンサーの友人でケンブリッジ大学教師ハーヴェイは、彼のことを「愉快な枢機卿ビビエナ」と呼んでいる。

き枢機卿、ベザ¹²³やメランヒトン¹²⁴のごとき高名な説教者にして教師、フラカストリウス¹²⁵やスカリジュール¹²⁶のごとき碩学の哲学者、ポンタヌスやムレトウス¹²⁷のごとき偉大な弁論家、ジョージ・ブユカナン¹²⁸のごとき鋭い知識人、数多ある中で、何にもまして、フランスのあのオピタル¹²⁹のごとき威厳ある顧問官、思うに、この人以上に美徳の上に確固として築かれた、この人以上に完璧な判断力の持ち主を、フランスの領土が産み出したためしはないのだが——私が無数の他の人々とともにこれらの名前を挙げるのは、彼ら

123 **Beza, Th6dore de Beze** (1519-1605) は、ジュネーヴでカルヴァン Calvin の同僚として絶大な影響力を揮い、1564年カルヴァンの没後は、彼の後継者となった人。16世紀後半の大陸におけるもっとも有力な新教徒の指導者であった。神学上の著作が多数あり、彼の新約聖書ラテン語訳は今日なお版を重ねている。81年に有名なベザ版聖書手写本をケンブリッジ大学に寄贈した。1577年アーサー・ゴールドディング Arthur Golding は、ベザの原典から *A Tragedie of Abrahams Sacrifice* を翻訳出版した。

124 **Melanchthon, Philipp** (1497-1560) は、ドイツの人文学者・神学者・宗教改革者・教育者。1518年ウィッテンベルク大学でギリシャ語教授となり、ルター Luther の協力者として、ドイツにおける宗教改革の最も重要な指導者。新教初の体系的神学書『ロキ・コムネス』を出版した。豊かな学識と人文主義的興味を有し、エウリピデス Euripides、ルキアヌス Lucian、ピングロス Pindar、プルタルコス Plutarch などの翻訳もした。また日月の蝕を歌った彼の詩はスカリジュールの賞賛を得た。

125 **Fracastorius Girolamo Fracastro** (1478-1553) は、イタリアの医者で詩人・哲学者。ルネサンス時代の典型的な人文学者で、数学・天文学・地質学・植物学の大家でもあった。近代細菌学が興隆する300年も前に、伝染病の感染を近代的に述べた人である。パドバ大学で学び、母校の論理学教授を務めた後、ペローナで開業。当時好評を博したラテン語の詩『シフィリスあるいはフランス病』*Syphilis* (1530) は、梅毒の症状を綴ったことから、牧童の名に用いたシフィリスが、以後梅毒の病名となった。

126 **Julius Caesar Scaliger** (1484-1558) は、当時エラスムスの論敵として令名を馳せたが、数編の科学論文を残した。彼の死後出版の *Poetices Libri Septem* は、シドニーの批評の下地を作ったネタ本として重要である。

127 **Marc Antoine Muret** (1526-85) は、フランスの人文学者・古典学者で、ボワチエ、ボルドー、パリその他の地で教えた。28歳のとき、異端的思想と男色で有罪となり、イタリアへ逃亡してローマカトリックに改宗し、ローマ大学の教授としてプラトン、アレクステレス、キケロ、ラテン詩人、ローマ法などを原典批評的に論じ、モンテーニュを初め、全ヨーロッパの人文主義者たちに多大な影響を与えた。

128 **George Buchanan** (1506-82) はスコットランドの人文学者、歴史家、詩人。スコットランドで生まれたが、人生の大半をフランスで過ごした。数年間(1570-78年)故国でジェイムズ6世(イングランドのジェイムズ1世)の家庭教師を務めた。パリでラテン語教師を務めていた頃、フランシスコ会派を激しく攻撃したため異端として牢に繋がれたが、逃亡してボルドーで教師となり、モンテーニュなどを教えた。エウリピデスの劇 (*Medea* や *Alcestis*) をラテン語に翻訳したり、スコットランド史 (*De Jure Regni apud Scotos*, 1579) や自作の戯曲 (*Baptiste, Jephthes*)、プトレマイオスの宇宙論を擁護するラテン語の教訓詩 *De Sphaera* を書いた。

129 **Michel de L'Hopital** (?1507-73) は、フランスの政治家・法律家・ユマニスト・詩人で、宗教的寛容の主導者。フランソワ2世治下の1560-68年に大法官を務めたが、新教徒に対する彼の宥和的態度のためにカトリック・デ・メディチによって罷免され失脚した。新教主義陣営の強化を願っていたシドニーは、彼に敬愛を感じていた。

が他人の詩を愛読した人々であるからだけではなく、他人に読ませるため彼ら自身が作詩したからである。他のすべての場所でかくも暖かく受容されている詩が、私たちの時代のイングランドにおいてのみ敵意剥き出しの冷酷な受容に晒されていること、まさしく大地もそのことを嘆き、従って、かつてに比べて私たちの国土を飾る月桂樹の数も目減りしているのだと思われる。と言うのも、従来は、イングランドでも詩人たちはわが世の春を謳歌した、何より注目すべきは、軍神マルス¹³⁰の喇叭が最も高らかに鳴り渡っていた時代ですら、詩は華やいでいたのである。そして、泰平ゆえに無気力すぎる世の中が花々を家に散り敷いて詩人たちを歓迎するかと見えてしかるべき当今、詩人たちはヴェネチアの山師¹³¹とほとんど変わらない風評に晒されている。実を言うと、まさしく今の状況は、一方からすれば、詩歌に大きな賛辞を贈っていることでもあり、詩はヴィーナスと同じく¹³²（しかしもっと高尚な目的の為に）、ヴァルカヌスの平凡な家庭の平穏を楽しむよりは、むしろマルスとともに鉄の網に囚われて苦難を味わいたいと願っている。それはまた、今や一本の筆の苦しみにもほとんど耐えられない怠惰なイングランドに、詩人たちが昔ほど受け入れられない理由の一端を説明するものだ。以上を元にして、必然的に生じることは、剽窃まがいのことしか出来ない低能の下等な輩がそれを引き受けるということだ。こういう輩は、出版業者から報酬が得られれば、事足りると思っている。そして、エバミノンドス¹³³が以前は蔑まれていた職務を自ら実践することによって、彼の美德の誉れゆえに、その職務が高く評価されるようにしたと伝えられているのとは反対に、これらの輩は、詩に己の名を付すだけで、己の下品のせいでこの上なく上品な詩を下品極まるものにしてしまう。今日では、九人のミューズ神たちがみな子を孕んで私生児の詩人たちを産んでいるかのごとく、頼まれもしないのに、妾腹

130 ギリシャ神話のアレスと同一視されたローマ神話の軍神。ユピテル、クイリヌスと共に、国家の三主神を形成し、ロムルス・レムスの父と言われる。三月は彼に因んで名付けられた。

131 大道で台の上に乗し、言葉巧みにインチキ薬を売りつけたイカサマ商人が mountebank（元来、イタリア語で mount-on-(a)-bench の意）。ヴェニスがその本場とされていた。例えば、ベン・ジョンソン作『ヴォルポーニ、古きつね』を参照。

132 美と愛の女神ヴィーナス Venus は神々の鍛冶屋である醜い夫ヴァルカヌス Vulcan（主神ジュピターとユーノーの息子）を顧みず、凛々しい軍神マルスと浮気をした。夫は同衾中の二人を決して破れない鉄の金網を被せて捕縛し、神々の見世物として懲らしめた。元々はホメロスが語った話であるが、恐らく、シドニーはオウィディウス『変身物語』第4巻で読んだのであろう。

133 Epaminondas (c.410-362B.C.) はテーベ Thebes の将軍。レウクトラ Leuctra の戦い (371B.C.) で新戦法を案出しスパルタ Sparta 軍を撃破したのをはじめ、再三にわたる戦いでスパルタ軍を打ち負かし、メッセニア、アルカディアの独立を援助して、彼の友人 Pelopidas と共に、テーベを一時的にギリシャの最強国にした。

の詩人たちはヘリコン¹³⁴の岸辺を馬で大きく跳躍し、拳句の果てには、読者を早馬よりも疲労困憊^{ひろうこんぱい}させるのである。その間、他方では、「その心をティターンがより純粋な土をこねてこしらえた¹³⁵」品位ある詩人たちは、彼らの知性から溢れ出る成果を公表して下品な輩と同じ騎士団の仲間であると数えられるよりは、いっその成果を扼殺^{やくさつ}することに満足を感じるのである。

とはいえ、私は、詩人としての尊厳に上りたいと敢えて高望みを一度たりとしたことがないうちに、なぐり書きをして紙を汚す者の仲間に入れられ、私たちが世の評価に欠ける真の原因は、私たちが知恵の女神パラス¹³⁶を「蔑^{ないがしろ}にして詩人であると詐称し、真の詩人の資格に欠けることにあるのを自覚している。だとすれば、どの点で真の資格に欠けているのか、それを言い表すことができれば、感謝に値するであろう。しかしながら、私にそれが分かっていたら、自らを改善し、もう少しましな仕事をしていたはずだが。とはいえ、私は詩人の称号を望むなど一度もなかったのも、それを手に入れる手段も等閑^{なぞざり}にしてきた。ただ、いくつかの思想に征服され強く影響を受けたので、それらを表現しようと筆墨の貢物を捧げたに過ぎない¹³⁷。実のところ、詩そのものを喜びとする者たちは、自分たちが何をしているのか、どのようにしているのか知るように努めるべきであり、とりわけ、自分たちが詩作の才能に恵まれているのかどうか、媚びることをしない理性の鏡に映してとくと見

134 ヘリコン Helicon はギリシャ、バルカン半島南東部に位置し、名馬の産地として、また大詩人、ヘシオドス、ピンダロスを産んだ土地として名高いボイオティア Boeotia にある山の名。北西のパルナソス山から続く標高 1748m のそれは詩神 Muses の住む霊山とされ、その山中の、天馬ベガスの足で蹴って湧き出したという二つの泉は詩人の靈感の源であるとされた。2 世紀のギリシャの旅行家パウサニアスによって、ギリシャで最も豊穡な山と記されている。シドニーは（スペンサーと共に）ヘリコンを、ベガサスの蹄で蹴られて岩場に湧き出て、詩的靈感の泉とされたヒッポクレネ Hippocrene と勘違いして川として扱っている。

135 ラテン語原文は、**Queis meliore luto finxit praecordia Titan** (Juvenal, *Satires*, XIV, 35)。ティターン Titan は、Uranus (天空) と Gaea (大地) との結婚から生まれた巨人族の 12 柱の神々だが、後に、オリュンポス神族と戦ったタルタルス Tartarus に幽閉された。彼らはギリシャ最古の神々の一員ということであるが、シドニーは「創造主」という意味で利用しているようである。

136 Pallas Athene は、ギリシャの女神アテナ Athena で、ラテン語ではミネルワのこと。ゼウスと知恵の女神メティスの娘。メティスを最初の妻にしたゼウスは、彼女からやがて生まれる男の子に自分の王位を篡奪される運命にあることを知り、アテナを妊娠していたメティスを呑み込んでしまった所、頭に陣痛を感じたので、ヘファイストスあるいはプロメテウスに命じて、斧で頭を天辺を割らせた。するとその割れ目から武装した姿で飛び出したのがアテナで、これにより彼女は戦いの女神であると同時に、学問・叡智・思慮分別、及び技術万般を掌管することになった。ポセイドンと争ってアテナの守護女神となった彼女は、バルテノン神殿に祀られている。「処女神宮」を意味するこの社の通り、アテナは永遠の処女で、彼女の裸身を見たティレシアスは、罰として盲目にされたと言う。

137 恐らくこれは、『詩への弁護』を書いていた 1580 年頃には完成間近であった『アーケイディア』初稿を指しているのであろう。

極めるべきである。詩は、あたかも動物のように耳をつかんで無理やり引っ張られてはいけなく、穏やかに誘導されなければならない、いやむしろ、それが誘導しなければならないものであり、そのことが、古の学識者をして詩は神の賜物で人間の業ではないと言わしめた理由の一端である。他のすべての知識は、知性の力を持っている誰にでもそれを獲得する道は開かれているが、いかに刻苦精励しても詩人にはなれない、もしその人自身の天賦の才がそちらの方へ向かなければ¹³⁸。従って、古い諺に、「弁士は作られ、詩人は生まれる¹³⁹」とあるわけだ。しかし、私が常に戒めとしていることは、どんなに肥沃な土地であろうと肥料を与え耕さねばならないように、最も高く飛翔する知性にはダイダロスのごとき導き手を必要とするということである。当のダイダロス¹⁴⁰は、詩作の道においてもその他の学芸においても、しかるべき称賛の大空へと飛翔するための三つの翼を持っていると言われる。すなわち、技術、模倣、実践である。しかし、これらの技術上の規範にも模倣上の範例にも、紙の汚し屋の分際過ぎぬ私たちは、さほど煩わされない。なるほど実践はするが、馬の前に荷車を置くに等しく順序が逆である。知るために実践すべきところで、すでに知っているものとして実践している。こういう次第で、私たちの頭脳は、決して知識から生まれたのではないものを実に大量に産み落とす。言葉によって表現されるべき内容と、内容を表現すべき言葉と、二つの主要部分があるのだが、そのいずれにおいても私たちは技術もしくは模倣を正しく用いていない。私たちの内容は、全くもって、「好き勝手に御託を並べたもの¹⁴¹」であり、オウィディウスの詩句「言いたいことは何であれ、自ずと詩句になる¹⁴²」を誤って実行しているが、それを確かな隊列に組み立てないで、肝心の読者はほとんど自分がどこにいるのか定か

138 これは当時のプラトン主義的な考え方、詩は神憑りの靈感の産物であるとする考え方に言及している。

139 *orator fit, poeta nascitur* 起源未詳の言葉。

140 *Daedalus* アテネの伝説的名工。クレタ島のミノス王に仕え、ミノスの王妃パシファエが雄牛に恋すると、雄牛の模型を作って中に彼女を入れて思いを遂げさせてやり、この交わりによりパシファエが牛頭の怪物ミノタウロスを産むと、それを閉じ込めるために迷宮を考案した。アリアドネに懇願されて、テセウスに糸玉を持たせ、ミノタウルスを退治した後、迷宮を脱出する手段を教えた廉で、ミノス王の怒りを買ひ、彼自身が息子イカロス *Icarus* と共にそこに閉じ込められる羽目に陥ったとき、蠟と鳥の羽根で自分と息子のために人工の翼を作り、空中に舞い上ってそこから脱出して、イタリアのクマエに逃れ、シチリアのカミコスに行き、ココロス王の庇護を受けた。(飛んでいる途中で、息子のイカロスは父の忠告を無視してあまり太陽に近づいたため翼の蠟が溶けて海中に墜落し、溺死した。)

141 原文は、*quodlibet* で、討論の訓練として哲学的神学的疑問を自由に提示すること。一般に、スコラ哲学の用語とされる。

142 原文は、*Quicquid conabor dicere, versus erit* (Ovid's *Tristia*, IV.x,26) より。

ではないほどだ¹⁴³。

チョーサーは、疑問の余地なく、彼の『トロイラスとクリセイデ』¹⁴⁴において卓抜な腕前を披露した。彼に関しては、あの霞のかかった時代に彼にはあれほど鮮明にものが見えていたことと、この鮮明な時代に私たちがこれほど躓きながらよろよろと彼の後を追いつけることと、そのどちらにいつそう驚くべきなのか、私にはしかとは分からない。とはいえ、たとえチョーサーにも大きな難点があるにしても、あれほど畏敬すべき古い昔のことなので、それは許されてしかるべきであろう。『為政者の鑑』¹⁴⁵も、その本にふさわしく美しい個所に彩られているし、サリー伯¹⁴⁶の抒情詩にも、高貴な生まれの味わいと、高貴な精神に値するものが数多く備わっている。『羊飼の暦歌』¹⁴⁷

143 シドニーは自らの議論を継続し、よい詩は必然的に整然と組み立てられ、論理的整合性があると主張する。しかし、これらの資質がほとんどの英語詩には欠けていると、彼は感じているのだ。

144 *Troilus and Criseyde* トロイ戦争を背景とする 8,239 行の「ライム・ロイヤル連」による物語詩 (1385 年頃の作)。クリセイデに裏切られたトロイラスが非業の戦死を逃げるという悲恋物語で、ボッカチオ Boccaccio の『フィロストラート』*Filostrato* を粉本としているが、特にパンダルス Pandarus とクリセイデ Criseyde の性格描写にチョーサー独自のものがあるといわれる。シェイクスピアも『トロイラスとクリセイデ』*Troilus and Cressida* で同じ題材を扱っている。チョーサーの物語詩は、ルネサンス時代を通じて、その重厚な韻律、真面目な宗教的結束、作品に反映された学識ゆえに称賛された。シドニーは明らかにチョーサーによる物語構成の巧みに感銘を受けている。

145 *The Mirror of Magistrates* ヘンリー 8 世の宮廷に仕えた George Ferrers と Oxford の William Baldwin が編集・出版したイギリス史詩集とも言うべき韻文物語集。イギリス史上栄華を誇った多くの人物がおのれの没落の次第を物語ることを内容とし、1559 年の初版本には 20 の悲話が取められていた。その後数次の増補が行われたが、1563 年版から含まれた Thomas Sackville の “Induction” (はしがき) と “The Complaint of Buckingham”、及び Churchyard の “Shore’s Wife” とが巻中の秀逸とされる。中世的悲劇観が最もよく現れている書物としても興味深く、16 世紀後半の英詩に与えた影響は大きい。

146 Henry Howard, Earl of Surrey (1517?-47) は、ヘンリー 8 世の廷臣。名門貴族ノーフォーク Norfolk 公の息子。フランスやフランドルで軍務に服した後、1546 年に帰国したが、政敵シーモア家の策謀によって大逆の疑いを不当に受けて、30 歳にして刑場の露と消えた。早くからイタリア文学に親しみ、イングランドにおけるルネサンス文学の先駆者の一人となった。ワイアット Sir Thomas Wyatt と共に英詩に十四行詩 sonnet を導入・確立したことで有名。技巧的にはワイアットに優り、ペトラルカ風伝統の影響を受けながらも、イタリア式を変更して、イギリス式ソネット形式を生み出す端緒を開き、エリザベス朝独特のソネット形式を準備した。最大の功績は、『アエネーイス』*Aeneid* の翻訳に際してはじめて無韻詩形 blank verse を用いたことで、これは、とりわけ、マロウ、シェイクスピア等の劇作を論じるに当たって、英文学史上に特筆されるべきものである。彼の 40 篇の抒情詩はワイアットのそれと共に『トテル詩選集』*Totell’s Miscellany* (1557) に取められ、次代の文学に多大の影響を与えた。

147 *The Shepherdes Calendar* エドモンド・スペンサー Edmund Spenser (1552?-1599) の出世作 (1579)。12 ヶ月に割り当てた 12 の牧歌 (eclogue) より成り、当時の人々に英詩の新生を告げた作品。牧歌の体裁を取っているが、宮廷政治への暗喩が込められているとされる。「アレオバガス」という文学サークルで親交のあったシドニーに献じられた。スペンサーはチョーサーを尊敬していたこともあって、文体に擬古的などころがある。しかし、本詩集に序文として付けられた「ハーヴェイへの手紙」の中で、E・K は、スペンサーがこの牧歌の中で古風な言葉を用いた理由を次のように

も、その十二篇の牧歌には多くの詩情に溢れ、私の目に狂いがなければ、事実、一読に値する作品である。ただし、あのように詩の文体を古く鄙びた言語に合わせて組み立てたことは、褒められることではないと敢えて言いたい。テオクリトス¹⁴⁸はギリシャ語で、ウェルギリウス¹⁴⁹はラテン語で、サンナザーロ¹⁵⁰はイタリア語で、気取ってそのような技巧を弄してはいないからである。以上のものを除くと、印刷出版されたものの中で詩的筋力を兼備しているものは、(大胆な言い方をすれば)ほとんど眼にした覚えがない。その証拠を尋ねるには、それらの韻文の大概を散文に書き改め、その上で、その意味を問うてみればよい。さすれば、最後に何が来るべきか、最初に秩序だった計画を立てないまま、一つの詩行がただ雑然と別の詩行を産んだだけで、生まれたものは、脚韻はりりんと響きを立てるが、道理がほとんど伴わない雑然とした言葉の集合体という目も当てられない結果となっているのが分かるはず¹⁵¹。

【イングランドの文学事情② 演劇について】

説明している。「彼がこのような言葉を使ったのは、偶然の慣れからにしましても、その荒い響きが自分の歌にごつごつした鄙びた趣を与えてくれるため、ないしは、このような古くて廃れた言葉が田舎者たちに一番使われているので、羊飼たちの田舎ぶりを表すには何よりも似合うと考えて選んだものにしてしましても、そのような言葉がこの詩に大変な優雅さと、いわば権威とを与えていると、小生は確信しておりますし、あながち的外れではないとも愚考しております。」

148 **Theocritus** (c.310-c.250?270B.C.) は、多分シチリアに生まれたとされるギリシアの詩人。シチリアの田園風景の中で歌い戯れる牧人たちを描いた『牧歌』*Idylls*の作者として知られ、「牧歌の父」と呼ばれる。ウェルギリウスら古代ローマの詩人たちに甚大な影響を与えた。

149 **Vergilius Maro, Publius** (70-19B.C.) のこと。古代ローマの叙事詩人、牧歌・農耕歌詩人。自然と信仰を歌い、ローマの世界支配の偉大さを明らかにし、友人ホラティウスらと共に、ラテン文学の黄金時代を築いた。ここではとくにテオクリトスを模倣して、羊飼、山羊飼たちが木陰や泉の辺で歌う鄙びた歌の形を借り、繊細な情緒を自然の風物に託して歌った彼の10篇の『牧歌』*Eclogues* (or *Bucolics* 42-37B.C.) を指す。この中で、彼はローマ共和制末期の悲しみ、喜び、希望を彼らに託して歌い、恋の歌、歌の技比べ、来るべき黄金時代の夢と祈りなど、多彩で他の追隨を許さない詩法を駆使して作詩した。各詩の配列や詩行数の対照的配分などにも細心の工夫が凝らされ、さながら詩句で編まれた花籠の如き観を呈している。

150 **Sannazaro Jacopo**(1456-1530) はイタリアの詩人。ナポリでラテン語の詩作を学び、文名を上げてアラゴン王家の宮廷詩人となった。『アルカディア』は半ば自伝風牧人の愛の物語で、12の散文と牧歌から成る。ギリシャ・ラテンの古典とイタリア詩の伝統を巧みに取り入れたこの田園詩文集は、ペトラルカ以後、ロマン主義勃興以前のイタリア文学において、決定的な範例となった。シドニーの『アーケイディア』にも影響を与えている。以上の三人はみな牧歌の文学の先人たちである。

151 シドニーが「言葉」と「道理」、外的衣装である言葉と詩の概念的 inner 面との相違を強調するのは、当時の風潮と一致している。「創意工夫」つまり概念の発見と形成と、「言葉遣い」つまり概念への言語の適用とを区別して扱うのは、ルネサンス時代の論理学と修辞学では標準的なことであった。そのような言語と思想との区別という意識は、よい詩は散文に直されても論理的に首尾一貫性があるとするシドニーの確信を裏付けている。

わが国の悲劇と喜劇（糾弾の聲がそれに対して上がるのも故なしとはしない）は、正真正銘の教養の規律も巧緻巧妙な詩の規則も遵守してはいない。一つだけ例外は『ゴーボダック』¹⁵²であり（再度言えば、私は観劇したことのある作品についてだけ言及している）、他の劇とは違って、威厳ある台詞や朗々たる響きの詩句が満ち溢れ、セネカ¹⁵³の文体の高さにまで上りつめ、注目に値する道義心にも同様に溢れ、その道義心をこの上なく悦ばしく伝授し、かくして、詩の真の目的を達成している。ただし、実を言えば、劇的狀況の設定に関して、それには大きな欠陥がある。そのためこれはあらゆる悲劇の精緻な雛形とはならないかもしれないので、慙愧の念に耐えない。この劇の欠陥は、あらゆる肉体的有形の行動に必ずや伴う二つの輩、場所と時間の両方に関するものである。舞台は常にただ一つの場所を再現すべきであり、その中で予め想定される最大限の時間は、アリストテレスの指針¹⁵⁴でも

152 *Gorboduc* イギリス最初の無韻詩形で書かれた本格的悲劇。はじめの3幕はノートン Thomas Norton (1532-84)、残りの2幕はサックビル Thomas Sackville (1536-1608)の筆に成る。セネカの悲劇を手本として書かれ、その精巧な修辞文による死と復讐の活写は、その後の英語劇の発展に甚大な影響を及ぼした。1562年に女王エリザベス一世 Elizabeth I の御前で演じられた(初版は1565年)。リア王の後を継いだ伝説的な古代ブリテン王ゴーボダックは、兄王の例に学ぶことなく、王国を二人の王子フェレックスとボレックスに分割して与えたため、弟が兄を殺し、その復讐に王妃が弟を殺す。その結果、人民は謀反して王と王妃を殺し、王国は内乱に巻き込まれる。この悲劇は、扇動・内乱の惨状と主権分割による国家の崩壊の危険を、若き女王エリザベスに警告する「為政者の鑑」でもあった。

153 *Seneca, Lucius Annaeus* (c.4B.C.-A.D.65) は、ローマの後期ストア哲学者、劇作家・詩人。皇帝ネロ Nero の師であり、一時は政治においても活躍したが、皇帝の寵を失うと共に、ピソの謀反に加担した嫌疑を受け、自殺を命じられて死んだ。彼はビタゴラス、プラトン、エピクロス、キュニコス派に影響を受けつつ、ストア派の正統を守って哲学を理性的存在である人間の唯一の目的、幸福、善としての徳の修練に結び付け、倫理的生活の根本原則は、自然に従って生きることにあるとした。また、倫理的な神概念や神の意志である世界法則と人間の理性の同質性を強調し、ストア主義における理想主義的宗教的側面の形成に寄与した。著書は、7巻の『自然論』など多数。悲劇は『メデア』*Medea*、『オイディプス』*Oedipus* など約10篇あり、ルネサンスの演劇、とくに英国エリザベス朝の演劇に絶大な影響を与えた。セネカの劇は、元来、読むための劇 (*lese drama* or *closet drama*) で、全体が雄弁な演説調 (*rhetorical style*) で警句に富み、名文として後世まで親しまれた。一篇の劇は *chorus* の登場で始まり、5幕に区切られた。(イングランドでは、しばしば *chorus* のかわりに *dumb show* を用いてこれを模倣した。*Gorboduc* もその一例。) 戦闘、殺人その他の暴行は通常舞台の外で行われ、「使者」を登場させてその模様を語らせるという方法が用いられている。

154 アリストテレスは『詩学』第5章において叙事詩と悲劇との異同に言及し、その違いの一つとして両者における長さの違いを挙げ、叙事詩においてはその中で描かれる事件に時間的制限がないのに反して、「悲劇は、できるだけ太陽の一巡、もしくはそれに近い時間以内におさまるように努める」と述べている。ここから、芝居におけるいわゆる「時間の統一」(*the unity of time*) の規則を作り出し、「場所の統一」(*the unity of place*) と「劇行為の統一」(*the unity of action*) の規則をこれに加えて、いわゆる「三統一の法則」(*the three unities*) を作り出したのは、ルネサンス期の批評家たち(特に、16世紀イタリアの文芸批評家カステルヴェトロ Lodovico Castelvetro c.1505-71)

私たちの共通の理性でも、ただの一日であるべきはずなのに、この劇には、多くの日数と場所とが不器用に織り込まれているからだ。

とはいえ、『ゴーボダック』においてかくのごとくであれば、その他の芝居においては尚更である。それらの芝居では、一方の側にアジア、他方の側にアフリカ、その他多数の小国が存在し、役者が登場すると、先ずはおのれがどこにいるのかを告げることから始めねばならず、さもないと、話がうまく繋がらない。三人の貴婦人が歩いて花を摘む場面があれば、観客は舞台が庭園であると信じなければならぬ。しばらくして、同じ場所で船が難破した知らせを聞くと、その場所が岩礁であると受け取らなければ、観客が責任を負わされることになる。そのすぐ後で、火と煙を吐く恐るべき醜悪な怪物が現れたら、哀れな見物人は、今度はそれを洞窟と考える羽目になる。その間に、四振りの刀と丸楯とで表象された二つの軍隊が飛び込んで来る、その時には、どんなに頑なな意地っ張りでも、その場所を両軍が戦陣を整えた戦場と了解してもらわないことには、にっちもさっちも行かない。

さて、劇の時間については、更なる自由勝手が許されている。以下のようなことが、普通に起こるからだ。二人の若い王子と王女が恋に落ちる。様々な紆余曲折の後、王女は身籠り、かわいい男の子を出産する。その子は行方知れずとなり、成長して大人になり、恋に落ち、また赤ん坊が生まれそうだという、これらすべてがたった二時間¹⁵⁵のうちに起こる。理性的にそのような上演がいかにか馬鹿馬鹿しいか、感覚的にでさえ想像が付くし、その上、そのことを文学的演劇の理論が教示し、あらゆる古代の範例が正当化し、今日でも、イタリアの普通の役者たちがそのような愚を犯すことはあるまい。とはいえ、ここで、二日間の出来事を描くテレンティウスの『宦官(去勢奴隷)』¹⁵⁶の例を得意顔で引き合いに出す手合いがいるだろうが、それでも二〇年には遥かに及ばない。なるほど確かに言われれば、その通りであるが、この芝居は二日がかりで演じるべく作られていたので、それが表現する時間にぴった

である。「三統一の法則」は、古典主義の演劇では、アリストテレスの権威において金科玉条とされたが、アリストテレス自身は、そのようなことを規則としてはどこにも述べていない。また、この当時の慣例に則したシドニーの劇に関する考え方は、やがてシェイクスピアの登場によって、完全に破られることになる。シェイクスピア劇は、いわゆる「三統一の法則」を無視して構成されているからだ。

155 当時の芝居1回分の通常の上演時間。

156 **Eunuchus** ギリシャの喜劇詩人メナンドロス Menander (342-292B.C.) の同名の喜劇をローマの喜劇作家テレンティウス Terence (c.185-159B.C.) が改作したもの。題名は、タイス Thais に仕える女奴隷に恋した男が宦官に化けてその女に近づくところから来ている。娼婦タイスに言い寄る男の一人として Thraso が登場し、Thraso の食客 (parasite) として Gnatho が登場する。ところで、劇行為が一日で終わるこの喜劇にシドニーが言及するのは何らかの勘違いであり、恐らく、劇行為が一日以上を要するもう一つの劇『自虐者』と混同しているのであろう。

りと一致している。プラウトゥス¹⁵⁷も一箇所ですくじってしまったけれど、私たちは彼と共に的を射抜くようにし¹⁵⁸、彼と共に的を外すのは止めておこう。しかし、人々は言うであろう、ならば多くの場所と多くの時間を含む物語をどのように芝居にすればいいのかと。さすれば、その方々はご存じないのか、悲劇は詩の法則に縛られているのであって、歴史の法則に縛られているのではないことを¹⁵⁹。物語そのままを追い掛ける必要はなく、全く新しい内容を虚構化したり、史実を悲劇の最も便利な道具立てに沿うように調節したりする自由を、悲劇は持っていることを。それにまた、もし、報告することと再現することとの違いを心得ているのならば、目の前に見せられない多くのことを口で語ることも出来る。例えば、私はここに居ながらにして、ペルーのことが語れるし、話の中で、ペルーから逸れてカリカット¹⁶⁰の描写に赴くことも出来る。しかし、現実の行動でそれを再現することは、パコレットの馬¹⁶¹がない限り、出来ない相談だ。まさしく古代の人々が採用したやり方で、「使者」という手段を用いて、昔に、他の場所で行われたことを語らせたのである。

最後に、一コマの歴史的事件を再現・表象したいと思うのであれば、(ホラティウスの言に拠れば)「卵から¹⁶²」始めてはならないのであり、再現したいと思う一つの行動における大団円に取り組みねばならない。例を挙げて説明すれば、よく分かるであろう。ポリュドロス¹⁶³という少年の話だ。トロイ

157 この箇所は、恐らく、プラウトゥス **Plautus, Titus Maccus or Maccius** (c.254-184B.C.) の *Captives* への言及であろう。スカリジェールがその劇の「真実らしくなさ・あり得なさ」を批判しているからだ。プラウトゥスはローマの喜劇作者。アッティカの新喜劇、特にメナンドロス **Menander** をラテン語に自由に翻案した。彼の作品は130篇の多きに達したと言われるが、現存するのは20篇である。テレンティウス **Terence** と共にエリザベス朝演劇に多大の影響を及ぼした。代表作としては、『アンフィトルオ』 *Amphitruo*、『バッキス姉妹』 *Baccides*、『捕虜』 *Captiv*、『メナエクス兄弟』 *Menaechmi* (Shakespeare の *Comedy of Errors* の粉本) など、ローマの機知と力強い言葉に満ち、大衆に受けた。

158 この場合、「正確に模倣・描写すること」を意味する。

159 アリストテレス『詩学』第9章によれば、詩人は物事を実際に起こったとおりに述べる必要はなく(それは、歴史家の仕事だ)、ただ起こるかもしれないことを描けばよい。この話題は、ルネサンス時代の批評家たちの論争の的となった。

160 インド南西部ケララ州のマラバル海岸にある市。植民地時代ヨーロッパ貿易の重要基地で、キャラコの産地として有名。別称 **Kozhikode**。

161 **Pacolet** は、フランスの初期ロマンス *Valentine and Orson* (Charlemagne 物語系に属する) に出る小人。彼は翼の生えた魔法の馬を持ち、これに乗って思う存分に行きたい所へ縦横に駆けめぐ。この物語は1550年頃 **Henry Watson** によって英訳出版された (*History of Two Valyante Brethren, Valentyne and Orson*)。

162 **ab ovo** (Horace, *Ars Poetica*, 147)。

163 **Polydorus** トロイ最後の王プリアモス **Priam** とその妃ヘキュバ **Hecuba** の末子。ホメロスに拠れば、アキレスに殺害されたが、シドニーがここで引いている話はエウリピデスの悲劇 *Hecuba* に

戦役の際、彼の身の安全を^{おもんばか}慮って、父プリアモスによりトラキアの王ポリュムネストルの許へ多大な財宝ともども預けられる。数年後、ポリュムネストルはプリアモスの滅亡を聞き及び、財宝を独り占めにせんとして、その子を殺す。^{なきがら}亡骸はヘキュバに拾われる。ヘキュバは、同日に、その暴君に残虐の限りを尽くして復讐する妙案を思いつく。ところで、わが国の悲劇作家の一人であれば、どの時点から芝居を始めるであろうか。子どもを預ける所からに違いない。そうすると、彼はトラキア¹⁶⁴へと海を渡り、何年とも知れない歳月を過ごし、数知れぬ場所を旅することになる。しかし、エウリピデスはどこから始めているか。他ならぬ遺骸の発見のところからで、その他のことはポリュドロスの亡霊が語るに任せている。この件に関してはこれ以上敷衍するに及ばず、いかに鈍感な人でも理解に苦しむことはないであろう。

とはいえ、以上の目も当てられない馬鹿馬鹿しさの他にも、わが国の芝居と来たら、全くもって正しい悲劇でも、正しい喜劇でもなく、王様と田舎者とを混ぜこぜにしているのだ。劇の内容が特段そのことを要求するからではなく、田舎者は手荒く無理やり舞台に投げ入れられ、作法も分別もなく、身も世もあらず、荘重な問題の中で一役演じさせられる。これでは結果的に、感嘆も同情¹⁶⁵も、もしくは正しい陽気さ¹⁶⁶も、雑種犬に等しい彼らの悲喜劇¹⁶⁷では得られない。アプレイウス¹⁶⁸がいくらかそのようなことをしたのを、私は承知しているが、それは山ほどの時間をかけて物語られており、一瞬時に再現されてはいない。また、プラウトゥスに『アンフィトロオ』¹⁶⁹がある

出ている。

164 **Thrace** バルカン半島のエーゲ海北東部の地方。

165 これは、悲劇の効用である。

166 これは、喜劇の目的である。

167 悲喜劇は、やがて17世紀の初めに、ポーモンとフレッチャーによって発展させられることになる。フレッチャーはその『忠実な女羊飼』*The Faithful Shepherdess* (c.1610)の序文で、「悲喜劇は、陽気さと殺人という点でなく、殺人が欠けているという点でそう呼ばれる。そのお蔭で、いくらかは悲劇に近づくが悲劇にはならず、喜劇になるには充分ではない」と述べている。

168 **Apuleius, Lucius** (born.c.A.D.123) はアフリカ生まれのローマの作家・哲学者。カルタゴとアテネで学び、各地を旅行した後、主としてカルタゴに住んだ。ラテン語で書かれた古代唯一の完全な小説 *The Golden Ass (or Metamorphoses)* の作者として有名。この物語の主人公ルキウスは、葉を間違えて驢馬に姿を変えられた上に、盗賊団の手に落ちて酷使されながらも種々の面白い場面に遭遇する。これらの逸話の中で、最も有名なのは、「クビドとプシュケ」の物語である。驢馬は女神キュベレの信者たちの一行に仕えたりしながら、幾多の変身の後、エジプトの女神イシスの好意によって人間の姿に戻る。物語全体を人生の寓意（魂の感覚的低下とそのからの回復）と見る説もある。16世紀にW・Adlingtonの英訳が出た。

169 **Amphitryo** ゼウスがAmphitryo(n)の妻アルクメネ Alcmena に懸想し、彼女の夫に化けて彼女を訪れていたとき、本物のアンフィトロオが戦争から帰って来たというギリシャ神話を、プラウトゥスが（多分フィレモン Philemon の作に基づいて）喜劇にしたもの。神や英雄の登場、アルクメネの貞節が一方にあり、夫の偽者と本物とが鉢合わせする滑稽が他方にあるからであろう、プラウト

ように、古代ローマにも悲喜劇の例が一、二あることも、私は承知している。しかし、よく眼を凝らして観察すれば、古の人々は激しい角笛踊りと葬儀¹⁷⁰とを絶対に組み合わせることはないし、あっても極めて稀なことが分かるはずだ。そういう次第で、わが国の悲劇の喜劇の箇所には正当な喜劇は全く以って存在せず、目に付くのはただ、慎み深い耳には不向きなゲス口か、哄笑を巻き起こすには似合いだが、他には何もない極端な抜け作ぶりという結果になっている。しかるに、喜劇本来の真っ当な道は喜悦に溢れているべきであるし、同じく、悲劇は充分に高められた感嘆の内に常に維持されるべきである。

ところが、わが国の喜劇作家たちは笑いがなければ喜悦はないと思い込んでいる。これがとんでもない間違いであることは、笑いが喜悦に伴うことはありうるが、喜悦が笑いの原因であるかのごとくに、笑いが喜悦から生じるのでないことから分かる¹⁷¹。とはいえ、一つのことがその両方を一緒に生むことは充分にありうる。と言うか、むしろ、それらはそれら自身の内に、謂わば、一種の背反性を備えている。なぜなら、私たちは私たち自身、あるいは自然一般に適合しているものでなければ、何事であれ、ほとんど喜悦を覚えなからだ。笑いは私たち自身や自然にとって最も不適合な事柄からほとんど常に生じる。喜悦は永続的もしくは現在の喜びをその中に含んでいる。笑いにはただ侮蔑のなくすぐりがあるだけだ。例えば、麗人を見れば喜悦で恍惚となるが、思わず笑い出したくなることは絶対にない。畸形の者を見て笑うが、それに喜悦を覚えることは確実でない。私たちは幸運には喜びを覚えるし、不運には笑ってこれをやり過ごす。友人や故国の幸せを聞けば喜ぶし、それを笑おうとする人がいれば、その人は笑われて当然であろう。これとは逆に、私たちは、時にある事が全く誤解されてある人々の口の端にのぼり、ボーリングの玉¹⁷²のように自然な道筋を外れて行くのを見て笑うことも

ス自身がこれを“tragic-comoedia”と考えていたと、スカリジェールが述べている。

170 それぞれ喜劇的なものと悲劇的なもののたとえ。“hornpipe”は、その名の笛(吹き口と先端の拡声部とを牛の角で作った民間楽器で、clarinet に似ている)に合わせて踊った陽気な踊りのこと。

171 哄笑と喜悦とのシドニーによる区別は、彼自身の作品に明確に描かれている。喜悦は、聴衆の関心を維持するための詩人の能力に関わる。厳密に言えば、喜悦は真実を知的に把握することではなく、自然な善と美への直観的同意である。例えば、『アストロフィルとステラ』第7歌で、喜悦は「うっとりさせる」ものと歌われる。また、『アーケイディア』では、フィロクレア姫は直観的喜びで女装したピュロクレスに応じる。一方で、哄笑は歪んだもの、不自然なものへの適切な反応である。『アーケイディア』の低い卑しい身分の者たちは、哄笑を引き起こすように描かれているが、彼らの誰一人、読者の喜悦を引き出すようには意図されていない。

172 Bowls (芝生に木球を転がす遊戯)から来た比喩。Bowlsの球は完全な球体ではないし、また転がるときにカーブするように鉛などで bias (偏重) がつけてある。その球が自然に転がる道筋のことも bias と言う。

ある。そのような人々のことを鑑みると、心から申し訳なく思うが、やはり笑わざるを得ない。そう考えると、笑いを楽しんでいるよりは、むしろ苦しんでいることになる。とはいえ、この両者がうまく共存することを、私は否定しない。巧みに描かれたアレクサンダー大王の肖像画に、私たちは喜びを覚えこそすれ、笑いはしない。二十もの気違いじみた奇怪な様式を笑いこそすれ、喜びなど感じない。こうして、大ぶりの顎鬚を生やし、獐猛な顔つきのヘラクレス¹⁷³が女の服を着て、オムパレー女王¹⁷⁴の命令で糸紡ぎをする絵となれば、喜悦と笑いの両方が生まれる。愛に潜む、かくも奇妙な力の表現は、喜悦を生み出し、その行為への嘲りが笑いを掻き立てるのである。

要約すると、喜劇的部分の一意専心は、ただ笑いのみを掻き立てるような侮蔑的事柄にこだわるのではなく、詩の目的である悦ばしい教をそれに混ぜることであると、私は言いたいのだ。その笑いという点における大きな過ちで、アリストテレスがはっきりと禁じていることは¹⁷⁵、罪深い事柄を種にして笑いを掻き立てることである。そういう事柄は滑稽というよりは、むしろ呪わしく実に嫌なことであるし、あるいは、悲惨な事柄を種にすると、それは侮蔑されるよりは、むしろ同情されるべきものである。惨めな乞食や乞食同然の田舎者を茶化して人々の口をポカンとさせたり、もしくは、歓待の慣例に反して、他国人が同国人と同じように英語をうまく話せないからといって彼らをからかうとは、一体何事か。そんな事をして、何が学べるというのか。「幸薄き貧乏において残念至極なのは、それがために人が嘲笑を買うことである¹⁷⁶」ことが、確実であるのに。笑いの的にするのは、むしろ色恋

173 ヘラクレスはギリシャの伝説的英雄。次にあるように、リュディアの女王オムパレーのために屈辱的な女々しい仕事をせざるを得ない羽目になる。『アーケイディア』において、ピュロクレス王子はその肖像画を見て一目で彼が恋に落ちたアルカディアの王女フィロクレアに近づくためアマゾン女戰士に女装するが、その外衣を「とても高価な宝石できちんと留めている。その意匠はこうであった。小型のヘラクレスがかつてオムパレーに命じられたとおり手に糸巻棒を持ち、ギリシャ語で〈もはや勇者にあらず〉と添書きしてあった」とある。

174 **Omphale** ギリシャ神話に出るリュディアの女王。逆上してイフィクレスを殺害した罪を贖うため、ヘラクレスは1年間この女王の奴隷となることをデルファイ Delphi のアポロンの神託によって命じられた。彼女はいくつかの困難な冒険を彼に課したが、最後にはこの英雄に恋をし、彼を解放してその妻となり、息子ラモンを産んだという。別伝に拠れば、彼女はヘラクレスに女装させて、自分の足元で羊毛を紡がせる女の仕事をさせる一方で、自分はヘラクレスのライオンの皮を着て、棍棒を振り回したとされる。

175 『詩学』第5章の初めに次のようにある。「喜劇は、比較的劣った人々を再現するものだが、この人々たちはあらゆる悪を備えているわけではない。滑稽なものは、醜いものの一部なのである。なぜなら、滑稽とは、苦痛も与えず、危害も加えない一種の欠陥であり、醜さであるからである。手近な例を挙げると、喜劇の仮面は、ある種の醜さと歪みを持っているが苦痛を与えはしないのである。」

176 原文は、*Nil habet infelix paupertas durius in se, / Quam quod ridiculos homines facit.* (Juvenal,

沙汰に目がないしゃらくさい廷臣や、臆病で威張り散らす大言壮語の軍人、自分勝手に賢人と思いついでいる学校教師¹⁷⁷、ヘンテコに様変わりした外国帰りが適当だ。こういう輩が虚構の名前を与えられて舞台上を闊歩するのを迫真的に演じれば、そこには悦ばしい笑いと、教えに満ちた喜悦とが生まれるであろう。ちょうど他方において、ビュカナン¹⁷⁸の悲劇がえもいわれぬ感嘆をまさしく生み出すのと同じである。しかし、私は、芝居のことにあまりに多言を弄してしまった。そうしたのは、喜劇と悲劇には詩の卓越した部分が含まれているのに、イングランドでこれほど多用されながら、これほど哀れに悪用されるものはないからである。まるで無作法極まる娘のように、嫉の悪さを曝け出し、母である詩の操まで裁判沙汰にしてしまいかねないのだ。

【イングランドの文学事情③ 恋愛詩について】

上に挙げたもの以外の種類の詩に関しては、何らかの評価に値するものがわが国にはほとんど存在しないが、ただ歌と十四行詩という抒情的な種類のものがあるにはある。主よ、もし主が私たちに立派な心がけを与えてくださるならば、その心がけがいかによい目的に利用され、私たちに書く手と考える知性を授けられる神の不滅の美と不滅の善とを褒め称え歌うことにおいて¹⁷⁹、公私両面にわたって、いかに天上的な成果を生み出すことになるか、とくにご覧いただけるであろう。これを物するために言葉に欠けることは充分にあり得るが、題材に欠けることは絶対でない。私たちの眼を神の美と善とのいかなる側面に向けても、そこには必ずや、私たちの詩にとって新しい主題が新芽のように萌え出ずるはずである。とはいえ、実は、抗い難い恋という旗標の下にやってくるそういう類の書き物の多くは、もし私が求愛される女性であれば、その作者たちが真実恋をしていると私に納得させることなど決してできない類のものである。彼らは情熱的な言葉を、実に冷やかに使う。そういう熱情を本当に肌身に感じているというよりはむしろ、どこかの恋人たちが書いたものを読み、いくつかの大げさな文句を拾い集めてき

Satires, III, 152-3) .

177 シドニーの処女作「五月祭の佳人」に現れる大言壮語の空威張りする学校教師ロンバス Rombus は、この描写にぴったり当てはまる。

178 シドニーはここでビュカナン Buchanan の *Jephthes, Baptistes* を思い描いているのであろう。

179 シドニーはここで伝統的な新プラトン主義的愛の理念を披露している。それに拠れば、愛される女性はより高次の形象を反映し、それを通じて詩人が理想的なものを冥想する道具なのである。例えば、『アストロフィルとステラ』3番で、アストロフィルは、「ステラの顔にこそ、私は愛と美の実体を読み取る。そして、私に出来ることは、ただ、彼女の中に自然が記したことを写し取るだけ」と歌う。

て、それらを適当につなぎ合わせて使う人のようだ¹⁸⁰。ちょうど、かつて私に、風の呼び方に精確を期したいとして、今の風は北西で南よりだと教えてくれた人に似ている。とまれ、本当の熱情は、私に言わせると、書き手のあの〈追真力〉“forcibleness”、ギリシャ人の呼び方では〈エネルギー〉“Energia”¹⁸¹によつて、容易に現れ出るものである。とはいえ、私たちは詩の重要極まる一点の正しい使用を逸しているということで、当面は、短いながらも充分な論評ということに留めたい。

【イングランドの文学事情④ 詩語“diction”について】

さて次は詩の外側、即ち言葉、もしくは（私の言い方では）言葉による思想表現・言表“diction”に関して言えば、それはいっそう輪をかけて劣悪である。現に、甘露滴る令夫人のごとき雄弁が売笑婦のごとき厚化粧の気取った衣装をまとい、あるいはむしろ、そのようなきざな変装をして現れる。あるときには、もって回った耳慣れない言葉で飾り立てるので、怪物じみたとも、もしくは哀れなイギリス人には異国人とも思われるに違いない。別のときには、あたかも辞書の方法を遵守しなければならないかのごとく、同じ文字で始まる語を一心不乱に追跡し¹⁸²、また別のときには、文彩や詞花で粉飾するが、冬枯れして目も当てられない。とはいえ、この欠陥が韻文作者だけに特有のもので、散文を印刷公刊する人々¹⁸³の間にはこれと同じほど蔓延していなければと切に願うまでだ。（驚くべきことであるが）、このことは多くの学者たちの間でも、そして（哀れむべきことには）、若干の説教者たちの間でも、広く行き渡っている。実のところ、私の能力の限界を超える事柄に希望を表明する大胆さが少なくとも許容されるのであれば、（模倣するに最も値する）キケロやデモステネス¹⁸⁴を熱心に模倣する人々は、彼らの文彩や詩句のニゾリウス流の名言集¹⁸⁵を後生大事にするよりは、むしろ粉骨碎身し

180 『アストロフィルとステラ』6番で、アストロフィルは、他の詩人たちの「大袈裟で持って回った語句」をただ猿真似して詩を書く人々を批判し、自分の詩は模倣ではなく、真実の個人的感情表現であると断言している。同じく1番も参照のこと。

181 エネルギーとは、アリストテレスとスカリジェールに拠れば、概念もしくは理念を明確に述べる言語の質、言語における概念的明晰さのことである。その明晰さは、詩人が自らの「前概念」を正確に掌握しているかどうか起因する。

182 シドニーは極端な頭韻の用い方を攻撃している。

183 **Prose-Printers** 散文をパンフレットなどにして売る売文家のこと。

184 **Demosthenes** (c.384-322B.C.) は、古代ローマのキケロと並び称されるギリシャ最高のアテネの弁論家、政治家。アテネに対するマケドニアの脅威を力説した一連の弁論によってとくに名声を博した。彼の雄弁を伝える61篇の演説の中で特に有名なのは、『フィリッポス弾劾』を初めとする政治演説で、その文体はイソクラテスの影響で調和と洗練を示したが、やがて情熱的な個性が入り、厚重さと盛り上がりによって、聴く人を圧するものとなった。

185 16世紀イタリアの人文主義者で辞書編纂家の **Marius Nizolius** (or **Mario Nizoli**) (1489?-1576)

で翻訳することによって、謂わば、彼らを丸ごと貪り喰らい、彼らを丸ごと自分の血肉にして欲しいと願うものである¹⁸⁶。なぜと言うに、模倣者たちは食卓に出されるあらゆる料理に砂糖と香辛料を振り掛け、まるでどこぞのインディアンそっくりに、耳という適切で自然な場所に耳飾りを付けるだけでは満足せず、きっと美しいはずと確信して、鼻や唇に穴を開けて宝石を押し入れようとする。

キケロは、謂わば、雄弁の雷電でカティリーナ¹⁸⁷を追放しようとしたとき、しばしば「その者は生きています。生きてるだと？ しかり、しかも来ている、この元老院に罷り越してさえいる¹⁸⁸」のごとき反復の文彩¹⁸⁹を利用した。実際、十分に正当化される激怒に燃えていたので、キケロは彼の言葉が（謂わば）倍増されて彼の口から出るようにしたかった。それで、腹を立てている人々が自然にするのを私たちが眼にすることを芸術的技巧的に実行しようとしたのである。そして私たちは、それらの言葉の優美さに着目し、あまりに度を越して痼癢を起こしているようなとき¹⁹⁰、日常的な手紙の中に時にそ

は、キケロの名句を集め、それらをアルファベット順に並べたものを1535年に出版した。シドニーは他の作家から名文句を収集し模倣することを軽蔑し、詩は独自の個人的な感情を表現するものであると固く信じていた。

186 詩人はキケロやデモステネスを叡智と学問を磨くために読むべきであり、ただ単に優美な「文彩や名句」を集めるためにはないと、シドニーは主張する。キケロの文体を奴隷のごとく模倣することがルネサンス期には通例であり、「キケロ主義」と呼ばれた。この件に関するシドニーの見解は、弟ロバートへの手紙にある「私はオックスフォードの主要な悪癖であるキケロ主義に励むつもりは一切ない」に明らかである。

187 **Catiline** Lucius Sergius (108?-62B.C.) はローマの政治家。没落した貴族であった彼は、政治的扇動者となり、打倒ローマ共和国を目論んで、65B.C. と 63B.C. とに暴動を起こしたが、両次とも失敗した。特に、後者では、「カティリーナの陰謀」として知られるクーデターを画策して、ローマ郊外に社会の疎外者や不満分子の中から支持者を集めた。当時執政官であったキケロは、その陰謀を知り、元老院の同意を経て、陰謀者の一部を捕縛、処刑し、カティリーナをローマから追放した。その翌年、軍を派遣してカティリーナ一味を敗走させ、北イタリアのピストリア Pistoria の近くで彼を殺した。カティリーナを弾劾した元老院でのキケロの演説は有名である。

188 原文は、**O tempora, O mores! Senatus haec intelligit, consul videt; hic tamen vivit. Vivit? Immo vero etiam in senatum venit.** (What a time, what morals! The Senate knows these things, the consul sees them—and still this man lives. Lives? He even walks into the senate itself.) これと同様の「立派な根拠に基づく怒り」と言葉の反復の技法が『アーケイディア』のセクロピアに対するパミラ姫の応答に見られる。「しかしパミラ（彼女の頬は徳高い怒りのこの上なく美しい色合いで染まっていた）は、侮蔑の光を一気に放つ眼を光らせ、彼女（セクロピア）を連れてこう言った、『お黙りなさい、邪悪な女め、お黙りなさい。その息を与えてくださる御方を認めないとは、あなたは息をする価値もない人です。その御方を介して語っているのに、その御方に逆らって話すとは、あなたは舌を持つ価値さえもない人です』と。」

189 **Similiter Cadenses** 文中で同一または類似の音を繰返すこと。修辭的技巧の一種。

190 原文は、“when it were too too much choleric to be choleric”. “choleric”は“collar”, “colour”とも読める。後者と取れば、「激怒することがしごく当たり前と思われるとき」の意味になる。

れらを差し挟んだりする。大量の「類似韻律」が説教壇の荘重さとどれほど豊かに共鳴するか、類い稀な几帳面さでそれを利用しているデモステネスの靈魂を呼び出して語らせたいと願うばかりだ。実際、模倣者たちは巧緻精妙を弄しすぎて二個の卵を三個だと証明しようとした詭弁家¹⁹¹を私に想像させた。その人は詭弁学者と評されるかも知れないが、彼の労に対しては何の報いも得られなかった。同様に、これらの模倣者たちはそのような種類の雄弁を持ち込んで、表面的には精妙という評判を当然手に入れるかもしれないが、他の人を説得することはほぼない。説得できるかどうか彼らの精妙さの目的であるべきなのに。

さて今度はある種の印刷された論述における比喩表現に関してだが、私見では、あらゆる草本の著作家、あらゆる鳥獣魚介の物語に限なく調査究明されて、その種の比喩は群を成して殺到し、私たちの頭に浮かぶいかなる想念にも奉仕できるようであるが、しかし、それらは確実にこれ以上ないほど聞く耳をうんざりさせる馬鹿げたものである¹⁹²。比喩の力は反対意見の論者に何かを証明するためのものではなく、喜んで耳を傾ける聞き手にもっぱら説明するためのものだからだ。事が済めば、後はまことに退屈なお喋りに過ぎず、すでに得心しているか、あるいは比喩などでは得心しない人の判断力に少しでも知識を提供するよりはむしろ、その比喩があてがわれた本来の目的から逸れて記憶を牛耳ろうとする。私としては疑いの余地がないが、雄弁術におけるキケロの偉大な先駆者であるアントニウス¹⁹³とクラッスス¹⁹⁴とが、前者は（他ならぬキケロの証言に拠れば）雄弁術を知らない振りをし、後者はそれを尊重しない振りをしたとき、それはなぜかと言えば、平明な明晰さ

191 **Sophister sophist, quibbling philosopher, deceiver**の意。間違った思い込みの激しい議論を利用し、「白馬は馬に非ず」の類の屁理屈をこね回して教えた（とくに古代ギリシャの）詐欺師の学者。

192 ここでシドニーはジョン・リリー **John Lyly (1554?-1606)** や彼の追従者たちの過度な装飾的文体の意匠を攻撃している。リリーが『**Euphues: or the Anatomy of Wit (1579)**』で用いた虚飾的優雅な文体の模倣者たちの散文は、「耳をウンザリさせる」と巧みに評言されている。その文体は、頭韻、対照法、均衡、動物王国から引き出された形象の限らない選択を特徴とする。例えば、『**アストロフィルとステラ**』3番の「繊細な感覚の持ち主らには、九人の詩神を呼び求めさせるがいい。さすれば、彼らの空想をきらびやかに飾り立てて語ることが出来よう。ビンダロスの猿真似どもには、まだらの詞華で金びかの思想を彩色させ、美辞麗句をまともせ、得々と練り歩かせればいい。さもなくば、新発明の言葉の彩に、古い命題を添えて気品を持たせ、彼らをさらに堂々たる誉れで輝かせたらいい。あるいは、インド、アフリカで育つ植物や動物を素材とした異国風の直喩をちりばめ、一行一行を豊かにしたらいい」を参照。

193 **Antonius, Marcus (143-87B.C.)** は、キケロに先立つ傑出した弁論家の一人。99B.C.には執政官であった。シェイクスピアの芝居などによってわれわれにいっそう馴染み深いマーク・アントニウス **Mark Antony** の祖父。キケロの *De Oratore* に登場する主要人物の一人。

194 **Crassus, Lucius Lucinius (140-91B.C.)** は、アントニウスと同じく、キケロ以前の雄弁家・政治家で、彼の『雄弁家たち』*De Oratore* に登場する主要人物の一人。

によって二人は大衆の耳の信頼を勝ち取ることができ、信頼は説得まであと一歩ということであり、説得は弁論の最大目標であるからだが、(再度言えば)、私としては疑う余地などないが、二人はこれらの巧みな技法を限りなく物惜しみして利用したに相違ない。それを惜しみなくふんだんに用いる人は、誰にでも分かることであるが、自分自身の音楽に合わせて踊ることになり、真実らしく語るよりは、奇を衒^てって語ることにいっそう意を用いていることが、結局、聴衆にも気づかれるはずである。

疑問の余地なく(少なくとも私の考えでは疑問の余地なく)、幾人かの学問を専業とする方々よりは、何人かの大して学識のない宮廷人に、私はいっそうの健全な文体を見い出して来た。その原因として推測できることは、以下のことしかありえない。宮廷人は実践に基づいて彼が自然に最も適していると思ったことを遵守し、そうすることで(知らず知らずではあるが)修辞の技術によってではないが、その技術に適ったやり方で行う。しかるに、他方の学者の方々は、技術をひけらかすために技術を利用し、(これらの場合にするべきことであるように)技術を隠蔽^{いんぺい}するためにそれを利用しないので、自然から逃げてしまい、実際に、技術を誤用してしまうのである。

【イングランドの文学事情⑤ 英語と英語の韻律について】

しかし、何としたことか。思うに、私は詩から弁論へとさ迷い出たせいで檻の中に閉じ込められても致し方ないようだ。とはいえ、この両者は詩語と文体の問題の考察においてかくも類縁性を持っているので、このように脱線しても私の意図をそれだけいっそう十分に理解してもらおう手助けになるであろう。私の意図とは言えば、詩人たちが何を為すべきかを彼らに教示する仕事を引き受けることでは毛頭なく、ただ、私自身も他の人々に交じって罹病していることが露見しているの、たいていの作家たちの間で蔓延している共通の伝染病の、とある一、二の斑点を示しただけである。その目的は、私たち自身がやや歪んでいることを認識し、題材と様式の両者を正しい方向へ向けることである。私たちの国語は、実際に、それ自身をいかようにも優れた使い方ができる潜在力を備えているので、そこへ至るための絶大な機会を提供してくれる。それは混成言語¹⁹⁵ではないかと言う人々が多少はいることを、私は承知している。ならば、他の二つの言語¹⁹⁶から、より

195 「混成言語」とは、二つもしくはそれ以上の個別の言語を組み合わせで作った言語のこと。エリザベス朝の人々の間では、母国語は、それ本来の語彙が明晰さや雄弁さを成り立たせないとの理由で、もしくは、文法と綴字法が十分に標準化されていないとの理由で、不適切であるとの共通の異議申し立てがあった。

196 シドニーはラテン語とギリシャ語を、あるいは、ラテン語とフランス語を、この場合、念頭に置いているのであろう。

よい方を取れば、それだけいっそう優れているということにならないであろうか。それには文法が欠落していると言う人もいる¹⁹⁷。いや、実を言うと、それは文法を必要としないという贅辞を受けている。と言うのも、文法を持たず持てるであろうが、しかし、それは自ずと分かる易しい言語で、ややこしい格変化、性や法や時制の区別がないので、文法を必須としないのである。そのように面倒くさいものは、思うに、バビロンの塔の呪い¹⁹⁸に等しいもので、母国語を学ぶために学校に行かされる羽目になるなど、以ての外である。とはいえ、心に浮かぶ思いを美しくかつ適切に述べること、それが言語の目的であるが、それに関しては、英語は世界中のどんな言語に比べても対等だと断言できる。その上、二語もしくは三語を結び付ける合成語にかけては、英語は格別に恵まれていて、ギリシャ語に匹敵し、ラテン語を遥かに抜いているが、そのことは、一言語に存在しうる最高の美点の一つである。

さて、韻文の作り方には二種類がある。一つは古代風、もう一つは現代風である。古の人々は各音節の音量¹⁹⁹に着目し、それに従って韻文を作成した。当今の人々は音節の強弱を多少は考慮した上で、音節の数のみを遵守する。その主な生命線は、私たちが韻と呼ぶ語と語との類似する響きに存する。両者のうちどちらがいっそう卓越しているかについては、^{かまびす}喧しい議論を生むことになろうが、古代風の方が、単語も語音も音量を遵守するので、(疑いなく)音楽にはいっそう適しており、入念に計量された音節の高低音によって、様々な感情を精彩に表現するのもいっそう適している。後者の方も同様にその韻によってある音楽を耳に心地よく奏でる。要するに、それは、異なる方法によってではあるが、悦びを与えるので、同じ目的を果していることになる。両者のどちらにも甘美さが備わり、どちらにも荘重さが欠けてはいない。実のところ、英語は、私が存じているいかなる現代言語²⁰⁰にもまして、両方の種類の韻文に適している²⁰¹。古代風のものに応じようとすると、イタリア語は母音の数が多すぎて、絶えず母音脱落²⁰²に煩わされることになる。オラン

197 ラテン語文法と比べて、当時の英語はそのようにも感じられたが、母国語の格式・威信への国威発揚が高まるにつれて、英語文法の発達が緊急課題となりつつあった。英語の文法の比較的平易・明解を称揚するシドニー的考えに賛同する人々も増えて来ていた。

198 言語の混乱を指す。ノアの洪水のあと、人々はシナル Shinar の古都バビロン Babylon に天まで届く塔 (the Tower of Babel) を建てようとしたが、そのことは神の怒りに触れ、人々の言語が混乱して塔は完成されなかったという旧約聖書の創世記 (Genesis, xi. 1-9) の故事による。「それゆえ、その名をバベルと呼ぶ。ヤハウェがそこで全地の言語を混乱させたからである。」

199 Quantity 主として母音の長短のこと。

200 Vulgar language 民衆が使用する言語という意味で、ラテン語に対するものとしての諸国語のこと。

201 シドニーはここで母国語の卓越への自負心を披露している。

202 Elision 特に詩において、次の語が母音ではじまるときにあらわれる語尾の母音の脱落。英

ダ語²⁰³はこれとは逆に子音が多すぎて、韻文に相応しい心地よい滑らかな移行を生み出せない。フランス語は、その全体を通じて、アンティペナルティマという、後ろから三番目の音節に強勢のある単語は一つとてなく、スペイン語もこれとほぼ似たようなものなので、結果的に、彼らが強弱弱格²⁰⁴を利用すると、全く優雅さに欠けてしまうことになりかねない。英語は、これらの欠陥のどれ一つにも晒されていない。

次に韻律に関してだが、私たちは音量を遵守しないけれど、強勢を厳守する。このことは他の言語では出来ないし、さほど徹底してやってみようともしない。シジュエラ²⁰⁵、すなわち韻文の中途での自然な息つぎの場所は、イタリア語にもスペイン語にもない。フランス人と私たちとは、まずこれを怠ることはない。最後に、他ならぬ韻そのものに関してだが、イタリア人はそれを最後の音節に置くことが、つまり、フランス人が男性韻²⁰⁶と名付ける韻を作ることが、出来ない。常に最後から二番目の音節、つまり、フランス人が女性韻²⁰⁷と呼ぶ音節、もしくは、それよりさらに一つ前の音節、イタリア人がズドルッチオーラ²⁰⁸と呼ぶ音節にしか韻を置けない。前者の例は、buono, suono であり、ズドルッチオーラの例は、femina, semina である。他方、フランス人は、bon, son のごとき男性韻も、plaise, taise のごとき女性韻も持っているが、ズドルッチオーラは持たない。しかるに、イギリス人は、due, true; father, rather; motion, potion²⁰⁹のごとく、三つとも全部持っている。その他挙げれば切りがないが、この至らない無駄話もすでにずいぶんと広がりすぎたように危惧する次第である。

語で言えば、th'orient (= the orient), t'adore (= to adore) の類。

203 Dutch シドニーの時代には、ドイツ語 German もその中に含まれていた。

204 Dactyls dactyl の詩行。ダクティルはリズム形式の一つで、強弱々格（古典詩では長短々格）。例えば、英語で考えれば、“consonant”[kɒnsənənt] という語、“Travelling painfully over the rugged road” がそうである。そのことを、この語の accent は antepenultimate (Sidney の言う antepenultima) にあるというふうにも言える。

205 Caesura 詩行の中間で意味の切れ目によって生じる小休止。人工的な韻律形式の中で、単調に陥ることを防ぐ効果を持つ。例えば、“So vast is art, / so narrow human wit.” (Pope) の / 印のところにあらわれるがごときもの。

206 disdain, complain、あるいは sense, immense のごとく、詩の行末強勢のある音節だけ押韻するもの。

207 強勢のある音節の後にさらに弱い音節が続く2音節または3音節に跨る押韻のこと。例えば、motion, notion; morrow, sorrow; fortunate, importunate の類を言うが、元来は、フランス語で語尾に黙字の“e”のある押韻を言ったもので、シドニーもその元来の形で考えている。

208 Sdrucchiola 上記女性韻のうち3音節のものに相当する。なお、イタリア語の単語は弱音節で終わっているものが多いので、イタリア語では masculine rhyme は英語におけるよりは稀である。例として、signify と dignify。

209 motion, potion は、それぞれ3音節に発音する。

【結びの言葉】

かくのごとく、常の称賛に値する詩は、美德を育成する悦びに満ち溢れ、学問という高貴な名称に備わるべき天来の資質に一つも欠けていないがゆえに、詩に敵対して浴びせられる非難の言葉は、虚偽か根拠薄弱であるがゆえに、詩がイングランドで尊重されない理由は、猿真似詩人の罪であり、真の詩人の罪ではないがゆえに、そして最後になるが、わが国語は詩に敬意を表し、詩によって敬意を表されるに最適であるがゆえに、私は皆様方に切にお願いしたい。私のこの墨汁浪費の手慰みの駄文を読む不運に晒されたすべての方々には、まさしく九柱のミューズ神の名において、今後は詩の神聖な秘儀を侮蔑しないでいただきたい。今後は、詩人という名を耳にして、あたかも彼らが道化直属の後継者でもあるかのごとく、嘲笑することは止めていただきたい。今後は、韻文家という尊ぶべき称号を物笑いの種にしないでいただきたい。それどころか、アリストテレスと考えを一にして、彼らは古のギリシャの神々を宝物として守って来た人々であると信じていただきたい。ペンプスと共に、彼らは一切の文化・教養の最初の導入者であったと信じていただきたい。スカリジェールと共に、どんな哲学者の教訓も、ウェルギリウスを読むことほど速やかにあなたを高貴な人間にすることは出来ないと信じていただきたい。コルヌートゥス²¹⁰の翻訳者、クラウセルス²¹¹と共に、ヘシオドスやホメロスを紹介して、寓話のヴェールに包んで、あらゆる知識、論理学、修辞学、自然哲学や道徳哲学、その他の諸学を私たちに与えることが天上の神の思し召しであったと信じていただきたい。かく申す私と共に、凡俗の才人たちによって悪用されないように、意図して曖昧晦渋に書かれている詩の中に、多くの秘儀が含まれていると信じていただきたい。ランディーノ²¹²と共に、彼らは神々に深く愛されているがゆえに、彼らが書くものは何であれ天来の激しい靈感から発していると信じていただきたい。最後に一言、彼らが彼らの韻文によってあなたを不朽・不滅する所存と打ち明けるとき²¹³、彼

210 **Cornutus, Lucius Annaeus** 紀元1世紀ローマのストア派哲学者。皇帝ネロ Nero の詩を無遠慮に批評したため、陰謀の罪で68年にローマから追放された。叙事詩「ファルサリア」を書いたローマの詩人ルカーヌス Lucan およびローマの諷刺詩人ペルシウス Persius の師。ペルシウスは *Satire V* で彼に呼びかけている。

211 **Clauserus Conrad Clauser** (1520?-1611) はドイツの人文学者。Comutus の *De Natura Deorum Gentilium Commentarius* (『諸国神祇注解』) を編纂し、1543年にBasleで出版した。

212 **Landino, Cristoforo**. 15世紀のフィレンツェの人文学者。ホラティウス、ウェルギリウス、ペトラルカ、ダンテの研究家。彼が編纂したダンテ『神曲』(1481初版)の序文には「神懸りの靈感 *divine fury*」の一節が含まれている。

213 詩による美や名声の永遠化の主題は、ルネサンス期の詩人たちの間で繰り返し歌われた。例えば、シェイクスピア『ソネット集』の特に前半部分を参照。

らの言葉を信じていただきたい。

こうすれば、あなたの名は必ずや印刷屋の店先で花開き栄えるであろう。こうすれば、あなたは数知れない詩作の序文に縁付くことになるだろう。こうすれば、あなたは限りなく美しく、限りなく豊かに、限りなく聡く、限りなく全てになり、最上級の褒め言葉に飾られて生きることになるであろう。こうすれば、たとえ「解放奴隷を父として生まれた²¹⁴」としても、「もし自分の歌で何かをなし得れば²¹⁵」、忽ちにして「ヘラクレスの子孫」として育つことになるであろう。こうすれば、あなたの靈魂はダンテのベアトリーチェ、あるいはウェルギリウスのアンキセスと同じく至福の園²¹⁶に住むことになるであろう。しかし、(こんな「しかし」は御免蒙りたいが)、もしあなたが人の耳を鈍らせるナイル川²¹⁷の滝近くに生まれ、そのせいで、天上の音楽²¹⁸のごとき詩の妙音を聴くことが出来ないならば、もしあなたが地面を這いずり回るような心しか持たず、心を高めて詩の高空を仰ぎ見ることが出来ないならば、あるいはむしろ、教養のない田舎者の侮蔑を抱いて、粗搜し屋のモーモス²¹⁹のごとく、詩を解しないうすのろになりたいのであれば、その時には、私はあなたにミダスの驢馬の耳²²⁰を付けたいとは望まないし、あなたが(プ

214 **Libertino patre natus** Horace, *Satires*, I. vi. 6. “libertino” は奴隷の身分から解放された自由民を言う言葉。社会的身分としては卑賤。

215 **Si quid mea carmina possunt** Virgil, *Aeneid*, IX, 446.

216 それぞれの詩人によって、ダンテの愛する女性ベアトリーチェ Beatrice は天国に、アエネアスの父アンキセス Anchises は至福の楽園 Elysium に住まわされている。

217 ナイル川の滝の近くに永く留る人は、その轟音のために耳が聞こえなくなると言い慣わされていた。

218 天体は妙なる音楽 (spherical music) を奏でつつ運行していると言い慣わされていた。アダムとエヴァは、原罪を犯す以前には、この天上の学の音が聞こえていたとされる。

219 **Momus** 嘲笑と非難の神。ヘシオドス Hesiod の『神統記』*Theogony* に出る。夜の女神ニュクスの子の一人で、ゼウスの傍らにあって、最高神の計画に異議を唱えることにより、それをよりよいものにする役を演じる。例えば、増えすぎた人間の重荷に耐えかねた大地の訴えを聞いたゼウスが、人類を雷で焼き殺そうか、それとも洪水を起こして溺死させようかと思案していたとき、モーモスは自ら人間界にヘレネを誕生させる一方で、テティスを人間と結婚させてアキレウスを誕生させ、アジアとギリシャとの間に戦争を引き起こせばよいとゼウスに提言し、これによってトロイ戦争が起きたとされる。“a Momus of Poetry” とは、詩にけちをつける人。「うすのろ」 mome とモーモス Momus は言葉のしゃれ。

220 Midas は半ば伝説的なフリュギア Phrygia の王。ディオニュソスに何でも望みを叶えてやると言われ、触れるものがすべて黄金に変わる力を授けられることを願ったが、飲食物まで触れると黄金に変わってしまうので困り果てて、この厄介な力を取り除き、元に戻してもらったとか、パン神 Pan とアポロン Apollo とがフルートの吹き競べをしたとき、ミダスはパンの方が上手であると言ったため、激怒したアポロンはミダスの愚かさを示すために彼の耳を驢馬の耳に変えたという話がある。

ボナックス²²¹のように) 詩人の韻文によって首吊り自殺に追い込まれることを望まないし、アイルランドで実施されていると噂されているように²²²、あなたが韻文で呪い殺されることも望まないが、しかし、どうしてもこれだけの呪いは、あらゆる詩人に成り代わって、私からあなたに送り届けなければならない。あなたが生きている間、あなたは愛に生きても、十四行詩の芸を欠くために、絶対に愛する人の好意を得られず、あなたが死んだら、墓碑銘がないために、あなたの思い出は永遠にこの世から消え去るであろう。

完

221 **Bubonax Bupalus** と **Hipponax** とをシドニーが混同したらしい。ヒボナックスは辛辣な風刺をもって知られる前6世紀のギリシャの詩人。ブパルスは友人のアテニス *Athenis* と共にヒボナックスの彫像を作り、彼の醜貌を公の場で笑った。ヒボナックスはこの二人の芸術家に彼の詩で復讐したが、その攻撃があまりに痛烈であったために、二人は絶望して首吊り自殺を遂げた。この話を語っているのはプリニウス *Pliny* である。

222 アイルランドでは韻文の呪文を唱えて害獣や害虫を駆除すると言われた。シェイクスピアの『お気に召すまま』 *As You Like It* の中にも、“I was never so berhymed since Pythagoras’ time, that I was an Irish rat.” [III.ii.186-8] (私、ピタゴラスの時代以来、こんなに歌に歌われたことはなかった、あの人の輪廻転生説によれば、その頃私はアイルランドの鼠で、農民たちの歌で呪い殺されたかもしれないけれど) というロザリンドのせりふがある。